

# コドノA遺跡・コドノB遺跡(第1次)発掘調査報告

— 多気郡明和町上村 —

1 9 9 8 · 10

三重県埋蔵文化財センター

## 序

多気郡明和町は、斎宮跡や斎宮・伊勢神宮で使用した土器を製作していたとされる水池土器製作跡などの国指定史跡をはじめ多くの遺跡が存在することで知られています。これらの埋蔵文化財は、我々の祖先が残した貴重な文化遺産であり、現代に生きる私たちはこれを積極的に保護し、後世に伝えて行く責務を担っています。しかし、一方では地域経済の活性化、あるいは住民の生活や安全の向上のために各種の公共事業も必要と考えられます。そこでどうしても現状保存の困難な部分については、発掘調査を実施し、記録の保存を図ってきているところであります。

ここに紹介致しますコドノA遺跡・コドノB遺跡（第1次）の発掘調査結果も、一般地方道多気停車場齊明線の整備工事に伴ってやむなく実施されたものです。この発掘調査の成果が消滅した遺跡に代わり、地域の歴史ひいては文化を伝え、活用していくことを切に望みます。

なお、文末ながら、協議から発掘調査にかけて多大のご理解とご協力をいただいた県土木部（現：県土整備部）並びに松阪土木事務所（現：松阪県民局建設部）、明和町教育委員会をはじめ、発掘調査にご助力いただいた地元の方々に心より感謝致します。

平成10年10月

三重県埋蔵文化財センター

所長 大井興生

## 例　　言

1. 本書は、三重県教育委員会が三重県土木部から執行委任を受けて実施した、平成9年度一般地方道多気停車場齊明線緊急地方道路整備事業に伴う、多気郡明和町上村字コドノに所在するコドノA遺跡・コドノB遺跡（第1次）の発掘調査結果をまとめたものである。

2. 調査は、下記の体制で行った。

調査主体 三重県教育委員会

調査担当 三重県埋蔵文化財センター

主事 西出 孝

主事 奥野 実

3. 発掘調査後の出土遺物の整理は、調査担当者の他、管理指導課が行った。

4. 本書の執筆・編集は、西出が担当した。石器に関しては、実測をお願いした新田智子氏のご教示を得た。

5. 当調査区の位置は、国土座標第VI系を基準とし、図面上の方位は、座標北を用いた。真北は、座標北のN $0^{\circ} 20'$  W、磁北は座標北のN $6^{\circ} 40'$  Wである。

6. 本書で報告した記録及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

7. 本書で用いた遺構表示略記号は、下記のとおりである。

S A : 柱列 S B : 掘立柱建物 S D : 溝 S K : 土坑

S X : 墓（方形周溝墓） T P : テストビット

8. 調査にあたっては、県土木部道路建設課（現：県土整備部道路整備課）、松阪土木事務所（現：松阪県民局建設部）、明和町教育委員会、並びに地元の方々のご協力を得た。また、現地作業に際しては、以下の方々にご尽力いただいた。記して感謝の意を表したい。

川村芳昭・清水 忠・永田信夫・吉田 實・児島賢一・高森留吉・小川 陽・児島みち子  
小林君栄・小林つる子・島あつ子・高橋きよ子・高橋ひな・辻井眞子・西川好子・西場妙子  
樋口茂子・川村澄恵・清水艶子・広瀬美緒

9. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。

各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

# 本文目次

I. 前 言 .....	1
II. 位置と歴史的環境 .....	3
III. コドノA遺跡	
1. 遺 構 .....	7
2. 遺 物 .....	11
3. 結 語 .....	18
IV. コドノB遺跡	
1. 遺 構 .....	33
2. 遺 物 .....	37
3. 結 語 .....	39

# 挿図目次

第1図 遺跡位置図 .....	1
第2図 遺跡地形図 .....	2
第3図 調査区位置図 .....	3
第4図 遺構配置図 .....	5 ~ 6
第5図 調査区平面図 .....	5 ~ 6
第6図 コドノA遺跡 下層中央調査区遺物分布および土層断面図 .....	8
第7図 コドノA遺跡 下層東部調査区遺物分布および土層断面図 .....	8
第8図 コドノA遺跡 S H41・S B48・S A52実測図 .....	10
第9図 コドノA遺跡 S A49・S A51実測図 .....	11
第10図 コドノA遺跡 出土遺物実測図(1) .....	12
第11図 コドノA遺跡 出土遺物実測図(2) .....	13
第12図 コドノA遺跡 出土遺物実測図(3) .....	16
第13図 コドノA遺跡 出土遺物実測図(4) .....	17
第14図 コドノA遺跡 出土遺物実測図(5) .....	18
第15図 コドノB遺跡 方形周溝墓S X37・S X38実測図 .....	34
第16図 コドノB遺跡 S B35実測図 .....	35
第17図 コドノB遺跡 S A34・S B36・S A39実測図 .....	36
第18図 コドノB遺跡 出土遺物実測図(1) .....	37
第19図 コドノB遺跡 出土遺物実測図(2) .....	38

# 表 目 次

第1表 コドノA遺跡 出土石器類一覧表 .....	14
第2表 コドノA遺跡 出土遺物觀察表(1) .....	20
第3表 コドノA遺跡 出土遺物觀察表(2) .....	21
第4表 コドノA遺跡 出土遺物觀察表(3) .....	22
第5表 コドノB遺跡 出土石器一覧表 .....	37
第6表 コドノB遺跡 出土遺物觀察表 .....	40

# 図版目次

図版1 コドノA遺跡 調査前風景(西から) / A地区全景(東から) .....	23
図版2 コドノA遺跡 B地区全景(西から) / B地区西部調査風景(東から) .....	24
図版3 コドノA遺跡 S B48(北から) / S H41(南から) .....	25
図版4 コドノA遺跡 S D25(北から) / 下層中央調査区調査風景(東から) .....	26
図版5 下層中央調査区全景(西から) / 下層中央調査区土層(北から) .....	27
図版6 コドノA遺跡 出土遺物(1) .....	28
図版7 コドノA遺跡 出土遺物(2) .....	29
図版8 コドノA遺跡 出土遺物(3) .....	30
図版9 コドノA遺跡 出土遺物(4) .....	31
図版10 コドノA遺跡 出土遺物(5) .....	32
図版11 コドノB遺跡 調査区全景(西から) / 方形周溝墓S X37(西から) .....	41
図版12 コドノB遺跡 方形周溝墓S X38(東から) / S B35(西から) .....	42
図版13 コドノB遺跡 出土遺物(1) .....	43
図版14 コドノB遺跡 出土遺物(2) .....	44

# I. 前 言

## (1) 調査の契機

一般地方道多気停車場齊明線は、多気郡明和町と隣接する同郡多気町を結ぶ地域の幹線道路である。国道42号線と県道鳥羽松阪線（旧国道23号線）を繋ぐ近道として通行量は多い。路線内には対向に難渋する箇所も多く、通行の安全と地域の振興のために従来より度々、整備事業がなされてきた。今回の事業計画予定地付近は、以前から遺跡の集中する地域として知られていたが、平成5年に分布調査を行った結果、改めて石器・土器等の散布が確認された。平成8年度の試掘調査においても、コドノA遺跡では古墳時代の土器とともに土坑・溝・ビットが、コドノB遺跡では古墳時代・中世の土器とともに土坑・溝等が検出された。この遺跡の取り扱いについては、その保護に努めるべく関係機関で協議を重

ねたが、現状保存は困難と判断し、やむなく発掘調査を実施して記録保存することとなった。

## (2) 調査の方法と経過

### コドノA遺跡

縄文時代～古墳時代末の遺構・遺物を中心とする上層約1.100m<sup>2</sup>の調査と、石器の出土が見られた下層の調査に大きく分けられる。また、東西に細長い調査区のうち、便宜上、西の方の約50m<sup>2</sup>の部分をA地区、A地区より東に20mほど離れた約1.150m<sup>2</sup>の部分をB地区と呼称した。B地区において、約200m<sup>2</sup>の下層調査を行った。

### コドノB遺跡

コドノA遺跡B地区より浅い谷を挟んで50mほど西に位置する。弥生時代～古墳時代末にかけての遺構・遺物が中心となる約700m<sup>2</sup>の調査を行った。



### ① 調査の方法

調査は、遺構面に影響のない範囲で重機による表土の除去を行った。

小地区の設定は、コドノA遺跡・コドノB遺跡とともに $4\text{m} \times 4\text{m}$ を基準とし、北から南へアルファベットを、東から西へは数字の番号を与え、地区名は北西隅の杭を基準とした。コドノA遺跡の下層については、調査対象範囲について上層のD18の杭を基準に、 $2\text{m} \times 2\text{m}$ の小グリッドを設定し、南北隅の杭を基準に遺物を取り上げた。

### ② 調査の経過

#### 調査日誌（抄）

6月2日 コドノA遺跡B地区の表土除去。排土は、調査区の周囲の畑に置かせてもらったので一日で終了。

6月3日 道路予定地のセンター杭を基に $4\text{m}$ グリッドの地区を設定。

6月5日 現場事務所のプレハブ組み立て。発電器・ベルトコンベア等の搬入も完了。

6月6日 測量業者にコドノA遺跡の周囲の4ヶ所に基準点を設置させる。

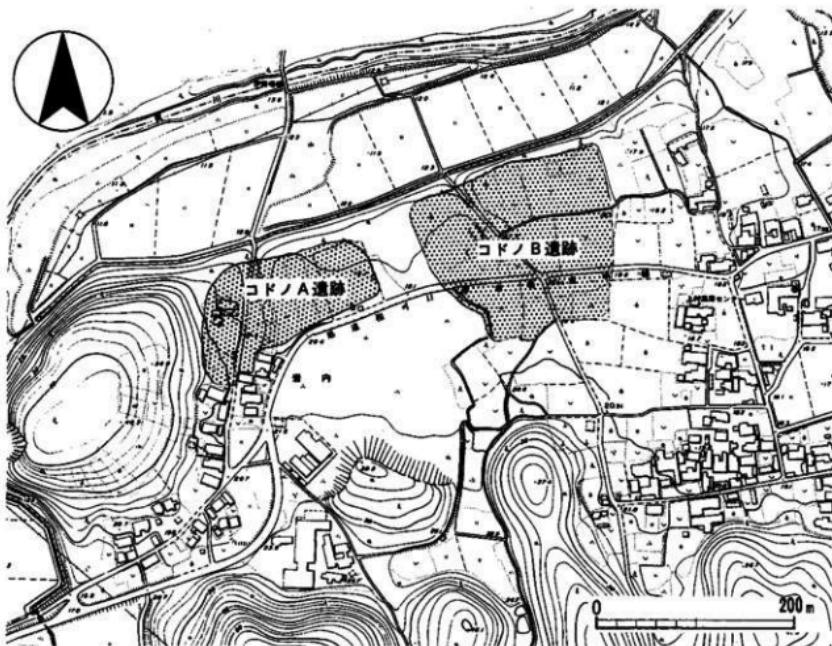
6月9日 作業員を含めての調査開始。しかし、あいにくの雨で挨拶と作業手順の説明等のみで終わる。

6月10日 検出作業開始。現場は、昭和40～50年代にかけてミカン畠として利用されており、当初、その伐根の跡と遺構との見極めがつかず困惑する。遺物は、古墳時代末の甕などとともに縄文晩期の土器が多く混じる。

6月13日  $60\sim70\text{cm}$ の四角い掘り方に柱痕跡が残る6間以上×3間以上の大型の櫛立柱建物が見つかる。

6月25日 調査区ほぼ中央の北壁沿いに竪穴住居の一隅が見つかる。

6月26日 B21のピット3の地山と思われていた黄褐色土よりフレイクが2個出土。検出中にも石鏃・フレイクはいくつか見つかっていたが、下層はあるのか？



第2図 遺跡地形図 (1:5,000)

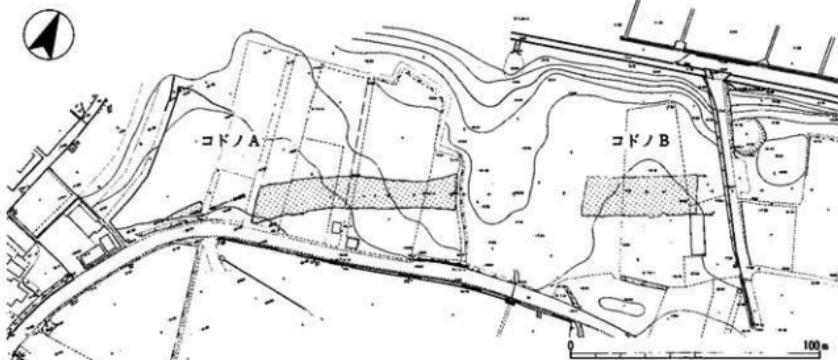
- 6月27日 下層を確認するため、遺構に影響を与えない箇所に 2 m<sup>2</sup>ほどのテストピット（以下、TPと表記）を 4ヶ所あける。昨日、フレイクが見つかったピット近くの TPで十数個のフレイクが出土。
- 7月1日 A地区の表土除去。擾乱の跡が多い。過去に砂利採取が行われたとの話を聞いていたA地区とB地区の間の部分も試掘してみたが、やはりその通りであった。
- 7月4日 B地区上層の掘り下げは終了。実測のための割り付け開始。
- 7月8日 B地区写真撮影。
- 7月9日 コドノB遺跡が始まるまで作業員一時休止。実測開始。
- 7月15日 道具小屋・発電器・ベルトコンベア等をコドノB遺跡へ移動。
- 7月17日 遺構レベル測定終了。B地区下層TPを10ヶ所設定。
- 7月18日 掘り下げ作業再開。TPよりナイフ形石器出土。並行してA地区的遺構検出。遺物は、B地区に比べ少ない。
- 7月24日 A地区的掘り下げは終了。コドノB遺跡の表土除去。調査前に植っていた杉の木の根を慎重に取り除きながらの作業となる。本日より、コドノA遺跡と並行して調査を行う。
- 7月25日 A地区清掃後、写真撮影。コドノB遺跡の表土除去終了。
- 7月31日 コドノA遺跡で基準としたセンター杭の延長上にコドノB遺跡でも地区杭設定。
- 8月4日 下層の掘り下げは終了。
- 8月6日 A地区実測・遺構レベル測定終了。コドノB遺跡遺構検出・掘り下げ開始。
- 8月8日 排水溝を伴う 4間 × 3間の掘立柱建物が1棟検出される。
- 8月11日 下層のサンプル土採取と写真撮影。本日をもってコドノA遺跡の調査すべて終了。
- 8月21日 コドノB遺跡遺構掘り下げは終了。
- 8月22日 清掃後、コドノB遺跡全景写真撮影。
- 8月25日 道具類の清掃・後片付け。作業員による作業終了。実測のための割り付け。
- 8月27日 実測・遺構レベル測定終了。
- 8月28日 道具等撤収。明和町教育委員会へ現地説明会の開催について地元自治会への連絡を依頼。
- 9月6日 雨の中、現地説明会を開催。

## II. 位置と歴史的環境

### (1) 位置

コドノA遺跡(1)・コドノB遺跡(2)は、三重県

多気郡明和町上村字コドノに所在する。現在の行政区画では明和町の南西端にあたる。轍川を境に北は



第3図 調査区位置図 (1:2,000)

松阪市と接し、西は同郡多気町と近接している。祓川は、紀伊山系高見山に源を発する櫛田川の支流で、当遺跡の西約1.6kmの地点で櫛田川と分岐する。国指定史跡である斎宮跡（3）（明和町）<sup>①</sup>に斎王が入る前、禊をしたと想定される河川である。永保2年（1082）年、洪水により現河道に急変するまでは、祓川が櫛田川の本流であった時期もあるとされる。当遺跡は、地形的にはこの祓川右岸の洪積層の低位段丘上に立地し、標高は18~19mである。遺跡の北側は比高差5~6mの氾濫平野となっており、また、南側には多気町・明和町・度会郡玉城町の3町にまたがる高度40~100mの玉城丘陵が迫る。

## （2）歴史的環境

ここでは、今回の調査に関連する時代の祓川流域およびその近接地の遺跡について概述する。

### ① 旧石器時代

先述の玉城丘陵の丘陵端部は当時の住環境に適合していたと思われ、いくつかの旧石器の遺跡が知られている。平林遺跡（4）・三川遺跡（5）（多気町）では複数のナイフ形石器、不定形石核が出土している。<sup>②</sup>近くには、上村池A遺跡（6）・上村池B遺跡（7）（明和町）があり、上村池B遺跡からは細石刃・柳葉形尖頭器など旧石器時代末期の石器が出土している。<sup>③</sup>

これらはいずれも玉城丘陵の丘陵端部に位置するが、近年の土取り等によって既に消滅した遺跡もあり、付近には知られざる、さらに多くの遺跡があつたであろうと思われる。

### ② 縄文時代～弥生時代

続く縄文時代も玉城丘陵に位置する遺跡が見られる。先述の上村池B遺跡では、縄文時代中期・後期の土器・石器が見つかっており、上村池A遺跡では、時期は不明ながら縄文土器・石器・石錐が採集されている。さらに上村池A遺跡から西へ1.5kmの地点の斎宮池遺跡（8）（明和町）でも、縄文土器・石器が出土している。これらは旧石器時代を通じて動植物などの食料の確保とともに、水の得やすさという点から原始の時代の生活の場とされたのであろう。祓川右岸に位置する遺跡としては、金剛坂遺跡（9）（明和町）から中期末～晩期の縄文土器が出土している。<sup>④</sup>但し、これらの遺跡はいずれも撲点的と言える

ような遺跡とは言い難い。

それに比して米作りが始まる弥生時代になると、祓川右岸の洪積台地上にはいくつかの大集落が形成される。金剛坂遺跡・寺垣内遺跡（10）（明和町）<sup>⑤</sup>・斎宮跡古里地区などである。いずれも中期～後期にかけて多くの方形周溝墓が見つかっており、この辺りに継続的に複数の単位の集団が存在したことが推測される。これらの方形周溝墓は、次の当遺跡付近に数多く出現する古墳の礎となっていると言つて良いであろう。

### ③ 古墳時代

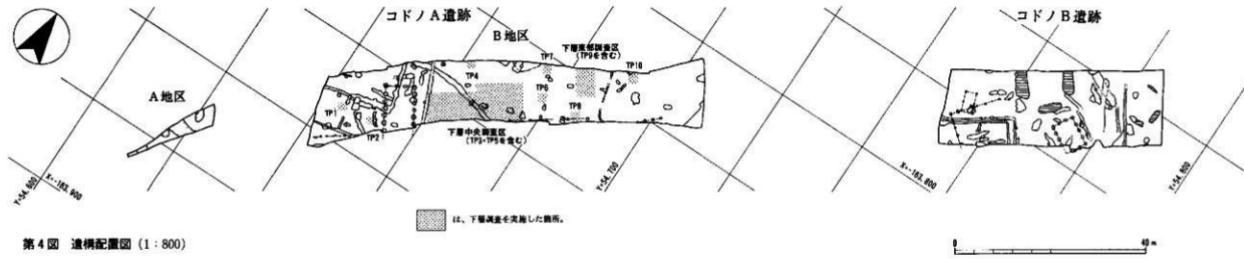
久保古墳・高田2号墳（12）・茶臼山古墳など松阪市の櫛田川の左岸域で4世紀後半に築造された始めた古墳は、5世紀前半になると右岸域である玉城丘陵にも現れる。方墳である権現山1・2号墳（13）に始まり、後半になると当遺跡に隣接する神前山1号墳（14）<sup>⑥</sup>・高塚1号墳（15）（明和町）・大塚1号墳（16）（明和町）などの帆立貝式古墳が築造される。<sup>⑦</sup>その後6~7世紀になると全国的趨勢に倣い、この付近の古墳も縮小・群集化し、多くの古墳群が生まれる。その一つである河田古墳群（17）（多気町）では、およそ100基の古墳が確認され、玉城丘陵全体では400基を越えるとされる。古墳時代のこの付近はある意味でかなりの殷賑を極めていた地と言える。

なお、平成9年度の横地高畠遺跡（18）（松阪市）の調査において方墳1基が見つかっている。<sup>⑧</sup>櫛田川と祓川間の氾濫平野の微高地の遺跡での発見は、玉城丘陵上の古墳との関係など興味深いものがある。

### ④ 古墳時代以降

櫛田川および祓川の下流域については、近年、主に圃場整備事業に伴う多くの調査が行われている。時代のまたがる複合遺跡が多いが、平成7年度調査の古川遺跡（19）（松阪市）<sup>⑨</sup>・平成8年度調査の中の坊遺跡（20）（松阪市）<sup>⑩</sup>・平成9年度の横地高畠遺跡などで古代から中世の集落の跡が確認されている。当遺跡の付近では、多気町河田のカウジアン遺跡（21）<sup>⑪</sup>で掘立柱建物の遺構とともに墨書きの杯が出土しており、同町弟園周辺とされる東寺領の莊園、大園庄との関連が指摘されている。

続く戦国時代では、コドノA遺跡の西の標高50mの独立丘陵に岩内城跡（22）（明和町）と言われる中



世城館がある。掘とされるものが現在も残り、近くには城堀という地名も残る。この岩内城跡と横田川を挟んで北畠氏の配下の潮田氏が居城とした神山城

址(23) (松阪市)<sup>④</sup>が対峙するように位置する。両城ともに一帯を睥睨するためには、恰好のロケーションであったと思われる。

### III. コドノA遺跡

#### 1. 遺構

##### (1) 地形と基本的層序

東西に細長い調査区は、北を流れる駿川に沿う洪積層の低位段丘上に位置する。大きくA・B両地区に分けた調査区のうち、より西に位置するA地区と東へ約20m離れたB地区の西部は玉城丘陵の北の丘陵端と言っても良く、元々は南から北に緩やかに傾斜していた思われる。標高は18m~19mである。調査前はA地区は水田、B地区は畑として利用されていた。

基本的な層序は、第1層の耕作土、上層の遺物包含層である第2層の褐色土(Hue10YR4/4)、上面が上層の遺構検出面であり、下層の遺物包含層でもある第3層の暗褐色土(Hue10YR3/3~3/4)、第4層の礫混じりの明黄褐色土(Hue10YR6/6)となる。第3層は、更に上の層がHue10YR3/4、下の層がHue10YR3/3と分層出来るかもしれない。第4層以外はどの層も厚さは20cmほどであり、また、東へ行くに従って各層とも白味を増す。

##### (2) 検出した遺構

今回の調査において検出した遺構は、上層では掘立柱建物1棟・竪穴住居1棟・樋もしくは柱列と思われる柱穴群3・土坑・溝6条等である。古墳時代末の遺構がほとんどであるが、一部、縄文晩期の土坑、奈良時代の竪穴住居・中世の柱穴も含まれる。下層については、旧石器時代のナイフ形石器等が出土したが、遺構は確認出来なかった。

##### ①旧石器時代(下層)について

下層については、上層の調査を終了後、B地区内で2m×2mのグリッド(テストピット)を10ヶ所設定し、遺物の分布を調べた。その結果を下に、2ヶ所でグリッドを拡張し、約200m<sup>2</sup>を調査対象範囲とした。その結果、遺物出土の中心となったのは、B地区中央3分の1の区域と、やや東部の北壁沿いの

区域であった。取り上げた遺物は、合計307個である。この付近では、もう少し石器分布があったと思われるが、下層の遺物包含層である第3層の暗褐色土の削平が激しく、すぐに第4層の礫混じりの明黄褐色土が現れる部分が多くあった。遺構は確認できず、また、明確なブロックの認定もできなかったが、遺物の平面分布から見て取れるいくつかの特徴を以下に概説する。

A、S 5 W16区を中心にその周囲のグリッドには、トゥール(ナイフ形石器3点・スクレイバー1点)および縦長の剥片が多い。

B、S 1 W10区付近には二次加工のある剥片(以下、RFと表記)及び使用痕の見られる剥片(以下、UFと表記)が集中する。明青灰色のチャートの破片2点の接合が1例。石核も1点見られる。

C、S 3 W8区周辺には、7点の赤色チャートが見られ、うち、2点の接合が2例。遺物数は多いが赤色チャートも含め、ほとんどが不定形の破片及び剥片である。石核が1点見られる。

D、S 3 W4区からS 1 W4区にかけて直径約2mの円形状にトゥール(ナイフ形石器1点)・石核(2点)・RFの分布が見られる。

E、N 4 E13区では遺物数は少ないものの、ナイフ形石器1点と、UFの割合が高い。

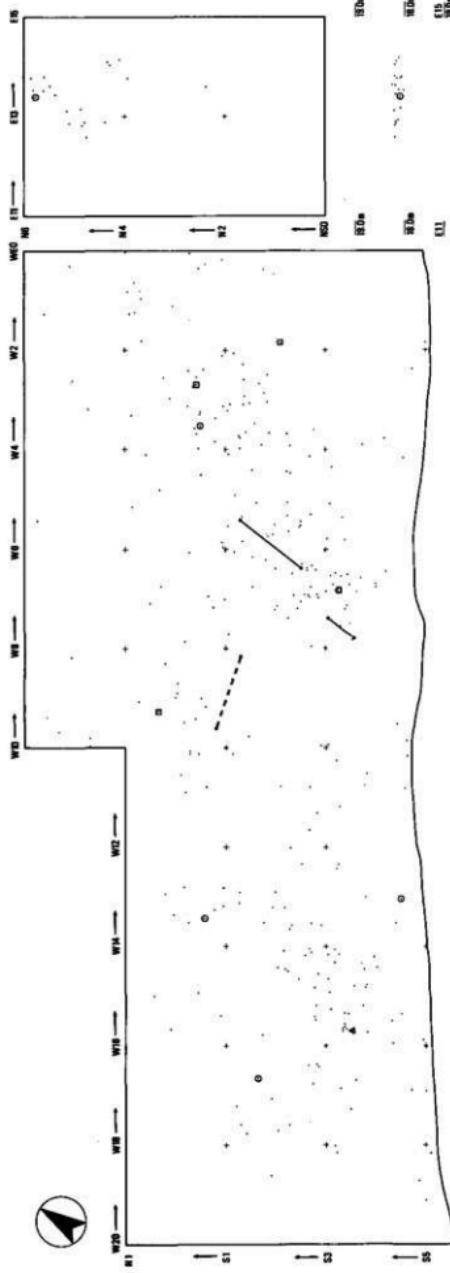
なお、A地区については擾乱が多く、また土層から下層ではないと判断し、調査しなかった。

##### ②縄文時代の遺構

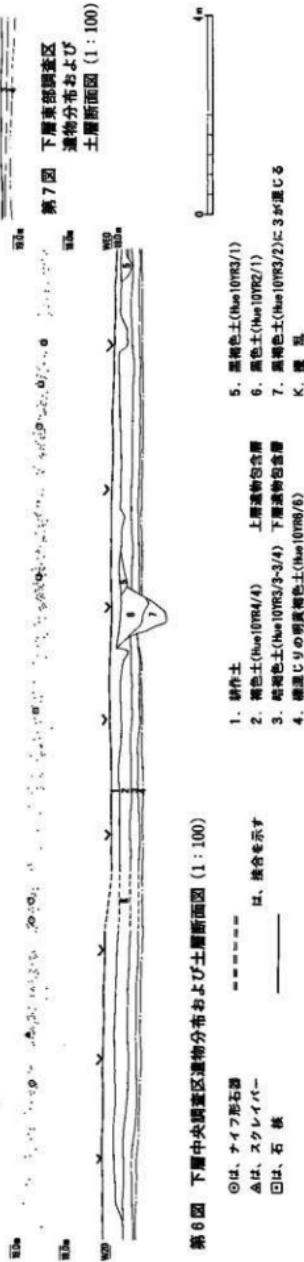
今回の調査では上層の多くの遺構から縄文時代晩期の土器が出土したが、埋土・遺物の出土状況から縄文時代の遺構と判断したのは土坑一つである。

##### A 土坑

S K44 B地区東部中央に位置する東西1.7m×南北2.2m、深さ0.15mの略円形の土坑である。形状は



- 8 -



第7図 下層東部調査区  
遺物分布および  
土層断面図 (1 : 100)

5. 黒褐色土 (He) [0m3/1]
6. 黒色土 (He) [0m2/1]
7. 黑褐色土 (He) [0m3/2] に 3が重じる
- K. 植 茜

1. 細粒土
2. 棕色土 (He) [0m4/4] 上層遺物含層
3. 棕色土 (He) [0m3/3-4] 下層遺物含層
4. 深淵じりの明褐色土 (He) [0m8/6]

第6図 下層中央調査区遺物分布および土層断面図 (1 : 100)

- ◎は、ナイフ形石器
- △は、スクリーバー
- ▲は、石板
- は、縫合を示す

浅い皿状を呈す。埋土より縄文晩期の土器片が出土していることから、縄文時代の土坑である可能性が高い。

### ③古墳時代末～奈良時代の遺構

細長い調査区の発掘という制約のため、建物・柱列・溝等、規模の大きい遺構はどれも全容は明らかでない。また、昭和50年代のみかんの木の重機による伐根によって破壊された遺構も多いが、以下に主なものについて記述する。

#### A 据立柱建物

S B48 B地区西部に位置する桁行6間(10.2m)以上×梁行3間(6.7m)の南北棟の大型の建物である。調査区外の南に伸びる。柱間は、桁行約1.7m、梁行1.8m~2.4m。掘形は、隅丸の方形で直径0.7~0.8m、深さは0.3~0.6m。柱痕跡は、直径0.3~0.4m、掘形底面からの深さ0.08~0.2m。棟方向はN30°Wである。柱穴より出土した土器から7世紀前後の建物と考える。

#### B 積穴住居

S H41 B地区中央北壁沿いに位置する。大部分は調査区外北へ伸びるため規模・形状は明らかでないが、東西については5m程度と推測される。検出面からの深さは0.1mと浅く、削平を受けていると考えられる。住居の南西部にあたる位置にある柱穴は、主柱穴の可能性が強い。土層断面から壁周溝の存在が認められる。出土遺物より奈良時代の建物と思われる。

#### C 柱列

S A49 B地区中央やや西よりの南壁沿いに東西に4間(16m)伸びる柱穴である。調査区外の西へ伸びる可能性を持つ。柱間は3.3~4.3m。掘形は略円形で、直径は0.4~0.6m、深さは0.1~0.5m。柱痕跡は、直径0.2~0.3m、掘形底面からの深さ0.02~0.15m。方向はN55°E。S B48と前後する時期のものと思われる。

S A51 一部他の遺構によって切られているものの、B地区西部南壁に沿ってN53°Eの方向に6間あったと思われる。調査区外西へ伸びる可能性がある。柱間は、1.4~2.0m。掘形の直径は0.25~0.4mで、深さは0.15~0.4m。出土遺物は少なく、所属時期は不明である。

S A52 B地区東部南端でN47°Eの方向に3間続く。調査区外の西および南へ伸びる可能性がある。柱間は、1.7mの等間。掘形の直径は0.5mで、深さは0.15m。掘形の大きさから据立柱建物の一部とも考えられる。須恵器が出土しており、やはり上述の据立柱建物と大きな時差はないと思われる。

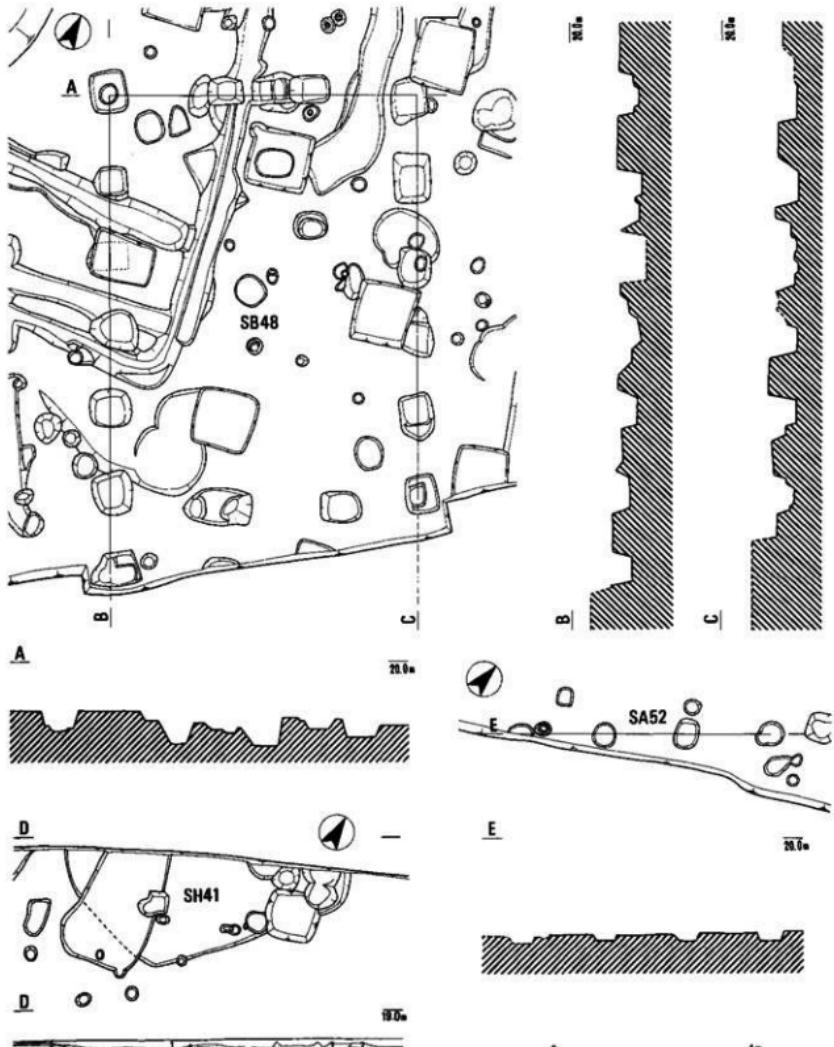
#### D 土坑

S K21 S B48の北に位置する。擾乱に切られ明確にはわからないが、東西4mほどの深さが3段に分かれる、スポットのような形状の土坑である。東へ行くほど南北の幅が広く、深さも増す。深さは浅い所で0.05m、深い所で0.4mとなる。埋土は黒色土。最深部の所では、こぶし大~人頭大の石子数個とともに古墳時代末の土師器の壺・須恵器の短頸壺・杯身等が投げ入れられた形で出土した。

#### E 溝

S D2・SD8・SD22 SD2は、B地区南西端を真っすぐに東西に横切る。SD8は、7mほど北をSD2に平行して流れ、調査区東端から15mほどで直角に北に曲がり、調査区外北へ流れ出て行く。SD22は、SD8の6mほど東をやはり平行に流れながら調査区南北を横切る。深さは、いずれも0.1~0.2mで出土遺物にも大きな時期差は認められない。以上の点から3つの溝が同一の時期に存在していたことは間違いなく、また、その時期は切り合い関係からSB48よりも若干古い時期のものと思われる。溝の役割については、道の側溝とも考えられるし、みかん畑の擾乱跡や調査前の土地区分とも方向を一にする事から何らかの区画溝であった可能性もある。

S D25 B地区中央を南端から北端へ緩やかに西へ弧を描くように横切る。幅は、0.7~1.2mで深さは0.9m。断面形状は、V字状を呈す。出土遺物の多くは縄文晩期の土器であるが、耕作土直下から埋土は切り込んでおり、機能していた時期は不明である。



1. 耕作土
2. 砂褐色土(Hue 10YR3/3~3/4)
3. 黒褐色土(Hue 10YR3/2)に2が混じる。竪穴住居土
4. 黒褐色土(Hue 10YR2/2)

5. 砂混じりの明黄褐色土(Hue 10YR6/6) 地山
6. 黒褐色土(Hue 10YR2/1)に2が混じる。
7. 黒褐色土(Hue 10YR2/2)に2と砂が混じる。
8. 黒褐色土(Hue 10YR2/1)に2と砂・焼土が混じる。

第8図 SH41・SB48・SA52実測図 (1:100)

## 2. 遺物

今回の調査で出土した遺物は、整理箱にして48箱であった。これらの遺物は、下層の旧石器時代・上層の縄文時代晚期～弥生時代・古墳時代末～奈良時代のものに大きく分けられる。本書では、上記の時代別、または遺構別に特徴的な遺物について概略を述べたい。なお個々の遺物の詳細については、遺物観察表を参照されたい。

### (1) 石器類

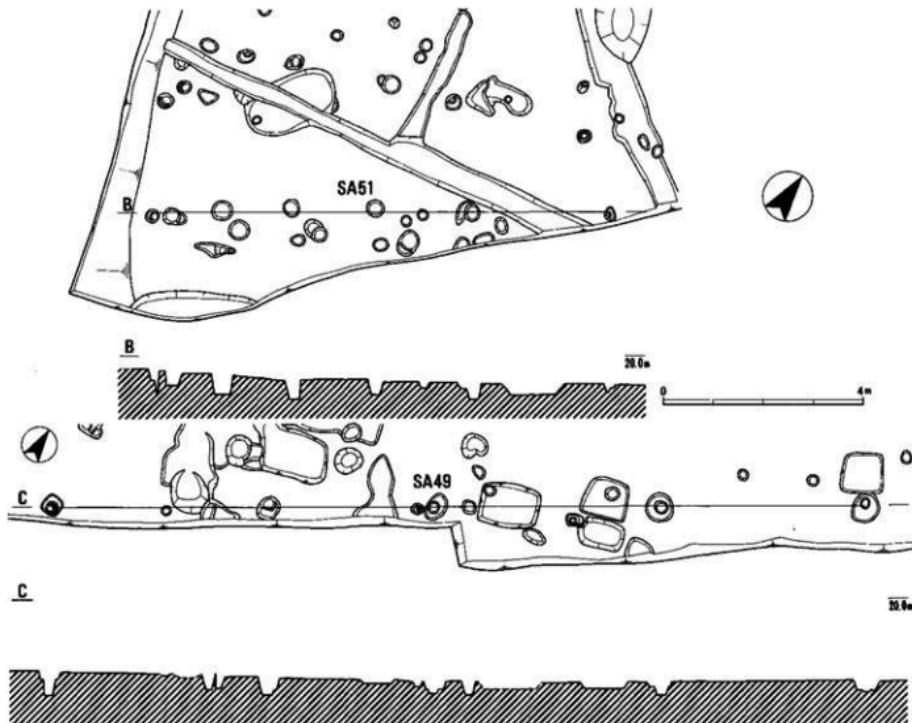
#### ① 下層出土旧石器類 (1~11)

B地区の下層約200m<sup>2</sup>について調査を行い、総計307個の石器類が出土した。構成はトゥール6点、石核4点、剥片及び破碎片290点余りと考えられる。トゥールの内訳はナイフ形石器が5点、スクレイパー1点である。

石材は、チャートが97%以上を占め、その他には石英が4点（内1点が水晶）、砂岩が3点、頁岩が1点でいずれもトゥールではない。チャートは櫛田川上流から流れてきたものを使用している可能性が強いが、平成8年の調査で12,000個余りの遺物が出土した櫛田川中流域の飯南町の粥見井尻遺跡（草創期）のチャートと比較すると良質なものが多い。

#### A、ナイフ形石器(1・6・7・9・11)

1は、右側縁に加工。左側縁基部に細かな剥離。主剥離面にバルブを残す。6は、左側縁に加工。バルブを残す。厚みのある素材を使用している。7は、右側縁、左側縁基部に加工。刃部に微細な剥離。先端部は欠損。9は、左側縁に加工。右側縁刃部に微細な剥離が認められる。基部は欠損か。11は、左側



第9図 SA49・SA51実測図 (1:100)

縁、右側縁基部に加工。

B、スクレイバー（2）

正三角形状の剥片の底辺部及び右側縁部に一部加工。

C、二次加工及び使用痕のある剥片（3・4・5・8・10）

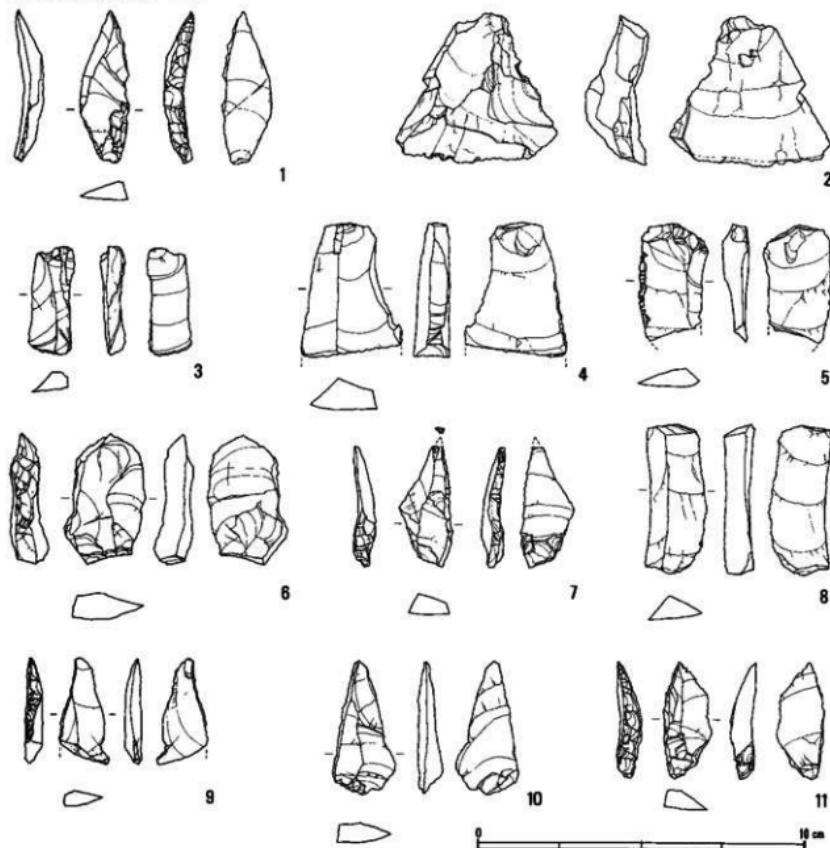
3は、表面に一部刃剥しのような加工。主剥離面にバルブを残す。4・5は左側縁に、8・10は右側縁に使用の痕跡が残る。4・5の下部はいずれも折れたものと思われる。

②上層出土の石器類（12～20）

上層の古墳時代末～奈良時代の遺構・包含層・攪乱などからもいくつかの石器類が出土した。時代・器種・石材も多様であるが、石鏃など縄文時代の石器類は共伴する土器から考えて晚期のものと考える。

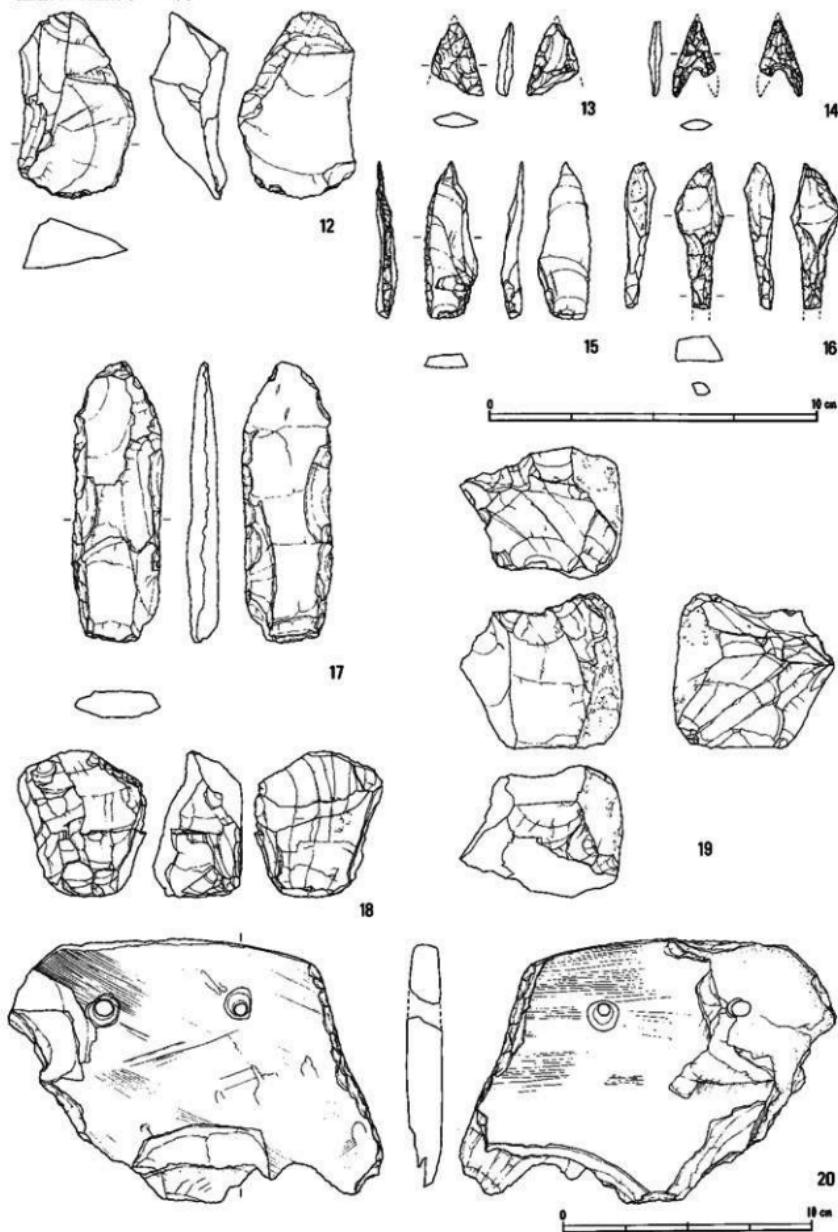
12は、エンドスクレイバー。右側縁下部には使用的痕跡が残る。チャート製。13は先端部と基部が欠損しているが尖頭器と思われる。裏面は周縁加工。下層出土の石器類と比し、チャートの質は悪い。14は石鏃で、二等辺三角形の平面形にかなり深い抉りに入る凹基無茎鏃である。先端部と片方の基部が欠損。

《下層出土旧石器類（1～11）》



第10図 出土遺物実測図（1）（2：3）

《上層出土石器類（12~20）》



第11図 出土遺物実測図（2）（12~16は2:3、17~20は1:2）

チャート製。15は、ナイフ形石器で左側縁に加工。先端に細かい剥離が見られる。主側面にバルブを残す。薄いチャートの素材を使用している。16は、石錐でつまみ状の頭部を持つ。先端部は欠損。サヌカイト製。17~20は比較的大型の石器類である。17は片刃の打製石斧で短冊型をしている。両面を加工。上端は先端部になる。砂岩製で薄い素材を使用している。18~19は石核で19は一部に自然面を残すが、18はほぼ全面剥離が見られている。いずれもチャート製。20は大型の石庵丁で片岩製。刃部及び片方の側端は欠損している。遺存する縫合孔は2個。稲束を根元からまとめて刈り取るのに利用したものであろう。

#### (2) 織文晩期後半~弥生時代の出土遺物

石器類と同じく上層の遺構に紛れ込んで多くの織文晩期の土器と若干の弥生土器が出土した。器形の

判別資料はないが、突帯文土器については主に口縁部の形状・刻み目の有無、突帯の形状・刻み目の有無等でA~Dに分類を試みた。

#### ① S D 25の出土遺物(21~45)

##### A、口縁端部に刻み目を有するもの(21~22)

今回出土した全突帯文土器資料のうち、この2点のみである。突帯上にも刻み目を有す。21はD字形の刻み目があるが、22はV字形か。

##### B、浅鉢(23)

浅鉢状のものと思われる唯一のものである。口縁部外面に貝殻による施文が見られる。

##### C、貝殻によるO字状の押圧突帯を有するもの(24~26)

24は口縁部が直立、25はやや外反する。26は突帯の幅が広く、高い。口縁部も大きく外に折り曲げら

器形 番号	グリッド 番号	整理番号 いじりばん ごう	S→N (cm)	W→E (cm)	幅 (cm)	高 (cm)	厚 種	石 材	長 さ (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 さ (g)	備 考
1	S 3 W18	No.6	135	135	18.58	18.58	ナイフ形石器	チャート	4.59	1.51	0.82	4.1	
2	S 5 W16	No.3	149	31	18.66	2.66	スクレイパー	チャート	4.54	4.66	1.84	25.0	
3	S 5 W16	No.7	96	158	18.62	18.62	R.F	チャート	3.29	1.29	0.73	2.7	
4	S 5 W16	No.7	64	5	18.54	18.54	U.F	チャート	4.03	3.03	1.11	12.2	
5	S 5 W16	No.10	162	40	18.00	18.00	U.F	チャート	3.60	2.05	0.81	5.1	下部欠損
6	S 1 W14	No.4	42	55	18.50	18.50	ナイフ形石器	チャート	3.94	2.41	1.03	9.3	
7	S 5 W14	No.4	50	97	18.62	18.62	ナイフ形石器	チャート	3.65	1.58	0.64	9.3	先端部欠損
8	S 1 W10	No.10	99	104	18.40	18.40	U.F	チャート	4.50	1.84	0.98	7.2	
9	S 1 W4	No.8	50	47	18.45	18.45	ナイフ形石器	チャート	3.20	1.52	0.51	1.8	
10	N 4 E13	No.10	84	15	18.00	18.00	U.F	チャート	4.00	1.69	0.75	3.9	
11	N 4 E13	No.11	175	40	18.09	18.09	ナイフ形石器	チャート	3.50	1.50	0.73	3.2	
12	B 13	SD 25					スクレイパー	チャート	5.64	3.47	2.32	33.6	
13	E 23	包含物					尖頭器	チャート	2.34	1.54	0.44	1.2	基部欠損、先端部もわずかに欠損
14	E 12	地山面上					石器	チャート	2.31	1.30	0.35	0.6	
15	C 18	包含物					ナイフ形石器	チャート	4.76	1.54	0.61	3.9	
16	E 36	塊					石器	サヌカイト	(4.37)	1.43	0.86	4.5	A地区出土
17	B 12	包含物					打斧	砂岩	11.31	3.58	3.29	68.0	
18		耕土					石核	チャート	5.06	5.08	3.54	109.3	
19	C 17	包含物						チャート	6.20	6.50	5.80	205.3	
20	D 10	包含物					石庵丁	片岩	(10.59)	(15.0)	1.32	258.8	2枚に削離。(計削離は、結合状態での数値)

\* 図版番号1~11はB地区の下層居住区からの出土遺物である。グリッドは2m×2mで、東西の軸を基準とした。

\* 器種の種類の「R.F」は二次加工のある片岩、「U.F」は使用度のある片岩を示す。

第1表 出土石器類一覧表

れている。

#### D、素文突帯を有するもの(27~30)

細片のため、確認できる突帯はいずれも1条である。その中で、31は比較的大きく、頸部にかけての貝殻による条痕調整が施されている。口縁部が直立するタイプのものが多い中で、37・38は口縁部がやや外反する。

#### 突帯文土器以外の遺物(40~45)

41・42は、浮線網状文土器である。いずれも器形は不明であるが、浅鉢状の土器の可能性が強い。口縁部直下に平行に2条の沈線がある40も、浮線網状文土器の可能性を持つ。43~45は、弥生土器である。43は端部外面に斜めに刻み目を持つ壺の口縁部。44は高杯形土器の脚部。45は壺の口縁部で斜格子状文と扇形文が施されている。

#### ②その他の遺構からの出土遺物(46~61)

46・50・51・53・54は上記の分類のCに当たるものだが、いずれも突帯の幅が広く、貝殻による押圧も明瞭である。52・58はDに当たる素文突帯を有するもの。59・60は同じく素文突帯をもつ深鉢の同一個体の上下の肩部あたりと思われる。上部に1条、その下部に2条の突帯を持つ珍しいタイプである。47は突帯文土器の平底と思われる。

以下は弥生土器である。48は中期の壺で内外面ともにハケメがある。49も同じく中期の壺形土器と思われ、口縁端部に刻み目を持つ。55は後期の壺の肩部で羽状文と櫛描き横線文を施す。57は口縁部に貝殻による刺突文とその下に簾状文が、61は体部に竹管による刺突文と櫛描き横線文が見られる。

56は53~55と同じSB48から出土した管状の土錐。時期は不明。

#### ③包含層及びA地区出土の遺物(62~85)

62~66は、Cに当たるもの。67~71は、Dに当たるものである。67・68の素文突帯は、断面が偏平な三角形。72は内傾する口縁部を持つ縦文土器。73・74はそれぞれ突帯に特色をもつ。73は2条の突帯を持ち、2条ともにD字形の刻み目がなされている。74は素文突帯と、その上部にO字状の押圧突帯があつたと思われる剥離痕が残る。75・79・80は弥生土器である。75は、前期の壺の肩部と思われ、ハケメと1条の細い貼付突帯が見られる。80は、壺状と思わ

れる土器の体部の張り出した所に貼付突帯をし、その上を櫛状具で刺突している。79は、後期の壺の頸～肩部にヘラ描き沈線が施されたものと思われる。76~78は時期が明確ではない。76は、貝殻条痕は見られるものの突帯文土器とは雰囲気を異にする。77は、平底のミニチュア土器。手捏ねで作りは粗い。78は、不明土製品である。両端の太さがやや違い、胎土から見て土偶の腕部である可能性も考えられる。同様のものがコドノB遺跡でも1点見つかっている。

81~85はA地区出土の遺物である。81はO字状、82は素文の突帯文土器。83も突帯文土器の肩～胸部分であると思われる。84は外反する口縁部を持つ縦文土器である。85も土偶の一部と思われる。左右どちらかの足の付け根から下の部分であろうか。

#### (3) 古墳時代以降の出土遺物(86~122)

大部分は、古墳時代末に属する遺物である。86は土師器の台付壺である。口縁端部に平坦な面を持つ。体部外面にハケメ調整がなされる。5世紀代のものと思われる。

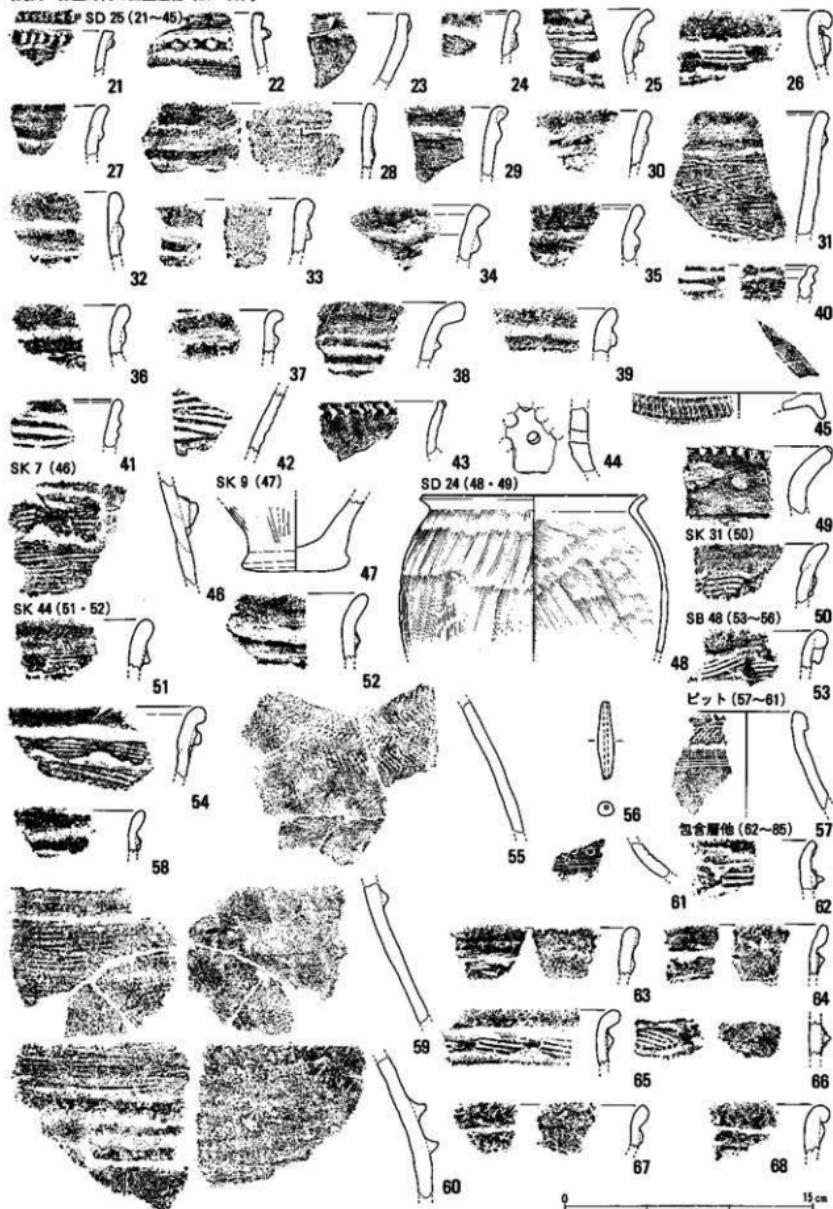
#### ①SK21の出土遺物(87~100)

87・88は土師器の碗・杯である。87は口径が小さく、立ち上がりが強いのに対し、88は緩やかで口径も大きい。89・90・91は土師質の須恵器の杯身である。意図して作られたものであろうか。92~95は土師器の壺である。いずれもくの字形に外反する口縁部からなる。92の口縁部は、少し内側に折り曲げ気味で、93・94は口縁部が少し肥厚する。95は口縁部をそのまま上方に立ち上げている。96~97は須恵器杯身。偏平な器形で田辺編年のT K 43型式に相当するものと思われる。98は、管状の土錐。99は蟲で貝殻による体部中央の刺み目を挟んで上下に2条の沈線が巡る。一部自然転が残る。100は、ほぼ完形の須恵器の短頸壺である。体部上半はハケ後カキ目調整。下半部はタタキ。

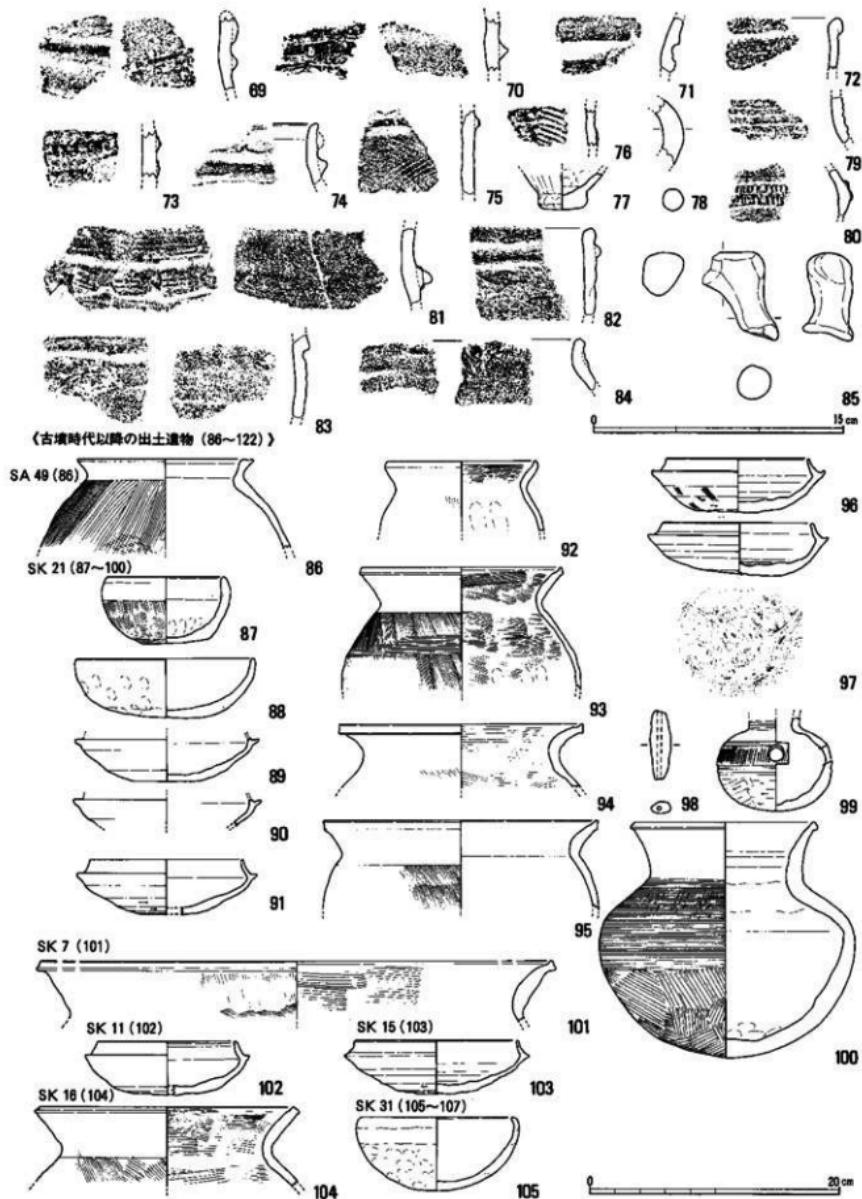
#### ②その他の遺構からの出土遺物(101~119)

101・104・106・112・114・116は、くの字形に外反する土師器壺の口縁部。101・114・116は、前述の93・94と、106は95と同様のタイプ。112は口縁端部が先彫りになる。102・103・111・113は、96・97と同様の須恵器の杯身と思われる。但し、113についてはたちあがりが短く、しかも生焼である。105・115

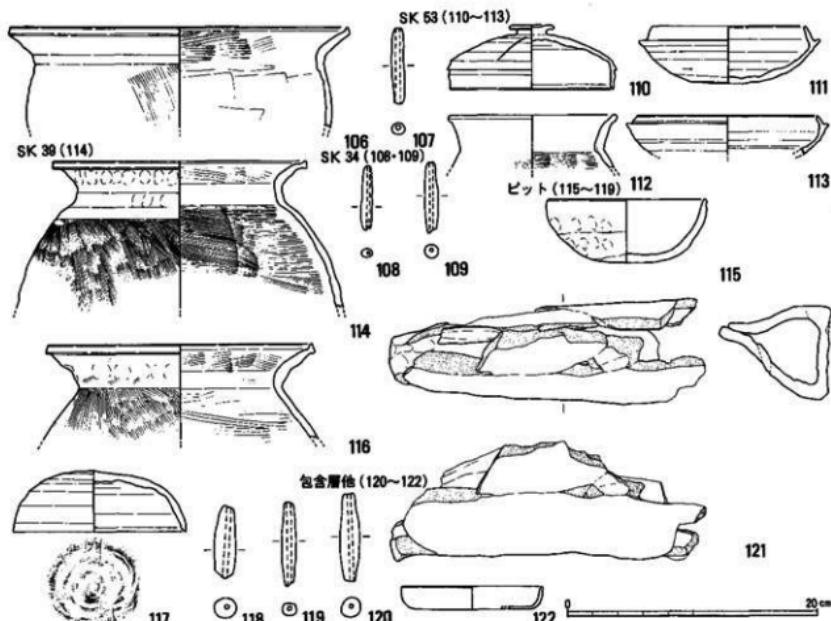
（本文・発生時代の出土遺物（21～86））



第12図 出土遺物実測図（3）（56は1：4、他は1：3）



第13図 出土遺物実測図(4) (69~85は1:3、86~105は1:4)



第14図 出土遺物実測図(5)(1:4)

は、土師器の杯で105は口縁部が少し内傾するのに対し、115はそのまま立ち上げる。107~109と118・119は管状の土錘。110は、有蓋高杯の蓋でつまみがつくもの。天井部の1/2以上にロクロケズリが施され、後も認められる。117は須恵器杯蓋で、全体に丸味を帯びて口縁端部も丸く収まる。やはりT K 43型式に併行するものであろう。あて具痕が見られる。

#### ③包含層及びA地区出土の遺物(120~122)

120は管状の土錘。121は不明土製品。類似のものが北野の遺跡でも4点ほど出土している。いずれも包含層からの出土で時期は不明。122はA地区的ピット出土の土師器の皿で、これだけは他の遺物よりずっと新しく14世紀代のものと思われる。

## 3. 結 語

今回のコドノA遺跡・コドノB遺跡は、以前より石巖等が採集され、古くから人々の生活の場であつたことが知られていた。鶴田川と載川の分岐点に近く、また丘陵から遙か伊勢平野を眺められるこの地は、原始の時代から一貫して要衝の地であったことであろう。今回の調査では、その要衝の地に相応しい遺構・遺物等が見つかった。以下に特徴のある遺

構・遺物について若干考察したい。

#### (1) 下層出土旧石器について

現在、県内ではナイフ形石器が見つかっている遺跡は100ヶ所を越す。発掘調査により初めてその存在が明らかになることも多い。近年、三重県埋蔵文化財センターが調査担当した遺跡に限っても、平成6年度の北野遺跡第4次調査(明和町)、平成7年度

の曾祢崎遺跡（明和町）<sup>①</sup>、平成8年度の曾祢崎古墳群（明和町）<sup>②</sup>、山崎遺跡（度会郡度会町）<sup>③</sup>が挙げられる。県内のナイフ形石器を出土する遺跡の約半数は、南伊勢地方を流れる宮川流域の河岸段丘上および宮川とその北をほぼ並行して東流する櫛田川に挟まれた丘陵縁辺に集中している。上記の遺跡もこの範囲に当たはるものであり、これには東海地方屈指の旧石器時代遺跡である出張遺跡（大台町）<sup>④</sup>やカリコ遺跡も含まれる。コドノA遺跡は、その前述の範囲の中でも特に旧石器の遺跡が集中する地域に位置すると言って良い。

萩川左岸は、氾濫平野である。微高地が所々に残るが、その多くは集落となっており、人々の生活の跡を旧石器時代まで辿るのは容易でないと思われる。コドノB遺跡（第1次調査）では確認できなかったが、萩川のより下流の右岸洪積台地での更なる発見

を期待したい。

## （2）SB48について

B地区西部に位置するSB48は、桁行6間（10.2m）以上×渠行3間（6.7m）の南北棟の建物である。隅丸の掘形を持ち、柱痕跡の遺存するものもある。大型の建物であるが、各柱穴の深さに大きな差異はなく、また、床束柱跡も検出されなかつことから、建物内の間仕切りの存在は確認できなかった。壁も荷重があまりかからない作りであったと思われる。調査範囲が限られるため断言はできないが、所属時期・規模、コドノA遺跡では、唯一の獨立柱建物であるという点からこの付近での有力者の住居であったと思われる。建物の西のSA51、東のSA49もSB48に付属する建物であった可能性が考えられよう。

## 註・参考文献

- ① 『唐王宮跡資料』（三重県教育委員会、1978年）。
- 『新宮跡資料選』（新宮歴史博物館、1989年）他。
- ② 西山傳左衛門『黒部史』（松阪市立図書館、1956年）。
- ③ 奥 義次「三重県の遺跡」（『日本の旧石器文化3遺跡と遺物（下）』雄山閣、1984年）。
- ④ 『明和町の遺跡』（皇學館大学考古学研究会、1987年）。
- ⑤ 山沢義貴・谷本親次「金剛坂遺跡発掘調査報告」（明和町教育委員会、1971年）。
- ⑥ 『三重県埋蔵文化財年報』16・17（三重県教育委員会、1985・1986年）。
- ⑦ 山沢義貴他「古里遺跡発掘調査報告－C地区－」（三重県文化財連盟、1973年）。
- 山沢義貴・谷本親次「古里遺跡発掘調査報告－D地区－」（三重県文化財連盟、1974年）。
- ⑨ 下村登良男「神前山1号墳発掘調査報告書」（明和町教育委員会、1973年）。
- ⑩ 下村登良男「河田古墳群周辺の古墳分布」（『河田古墳群発掘調査報告』Ⅲ 多気町教育委員会、1986年）。
- ⑪ 伊藤久嗣・吉木康夫「河田古墳群発掘調査報告」（多気町教育委員会、1974年）。
- ⑫ 中川 明・津田翠麻「横地高畠遺跡発掘調査報告」（三重県埋蔵文化財センター、1998年）。
- ⑬ 伊藤裕之「古川遺跡」（『古川遺跡・山口遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、1996年）。

- ⑭ 伊藤裕之・石渡誠人「中の坊遺跡」（三重県埋蔵文化財センター、1997年）。
- ⑮ 三ツ木貞夫・谷本親次「カウジアン遺跡」（『昭和54年度県埋蔵文化財調査事業地埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会、1980年）。
- ⑯ 『三重の中世城館』（三重県教育委員会、1976年）。
- ⑰ 田辯昭三「陶邑古窯址群Ⅰ」（平安学園考古学クラブ、1966年）。
- ⑱ 竹田憲治他「北野遺跡現地説明会資料」（三重県埋蔵文化財センター、1994年）。
- ⑲ 西村美幸・山田康博「曾祢崎遺跡発掘調査報告」（三重県埋蔵文化財センター、1996年）。
- ⑳ 『三重県埋蔵文化財センター年報』8（三重県埋蔵文化財センター、1997年）。
- ㉑ 松葉和也「山崎遺跡発掘調査報告」（三重県埋蔵文化財センター、1997年）。
- ㉒ 三ツ木貞夫・森田尚弘「出張遺跡調査報告書」（大台町出張遺跡調査会、1979年）。

鈴木克彦「伊勢湾沿岸地方における凸帯文深鉢の様相－伊勢地方からの視点－」（『三重県史研究』第6号、1990年）。

器 物 番 号	登録 番 号	器 種	出土位置 遺物 地区			計測値(cm) 口径 器高	調査・技法の特徴		地 土	性 成	色 調	残存度	備 考
			遺物	口径	器高		外: 口縁部にD字押圧突帯、口縁部を削取り後、組み目を施す	内: 口縁部下にV字押圧突帯、口縁部に組み目を施す					
21	016-01	漆 器 口 縁 部	B12	SD25					粗	並	浅黄褐色	小片	
22	016-04	漆 器 口 縁 部	D15	SD25					粗	並	淡黃褐色	小片	
23	018-07	漆 器 口 縁 部	C14	SD25					粗	並	にい黄褐色	小片	
24	018-08	漆 器 口 縁 部	E16	SD25			外: 口縁部下にO字状押圧突帯		やや粗	並	内: にい黄褐色 外: 灰黃褐色	小片	
25	018-06	漆 器 口 縁 部	D15	SD25			外: 口縁部下にO字状押圧突帯、口縁部外反		やや粗	並	浅黄褐色	小片	
26	012-01	漆 器 口 縁 部	C14	SD25			外: 口縁部下にO字状押圧突帯		やや密	並	にい黄褐色	小片	
27	017-07	漆 器 口 縁 部	E16	SD25			外: 口縁部下に素文突帯		やや粗	並	淡黃色	小片	
28	016-07	漆 器 口 縁 部	B12	SD25			外: 口縁部下に素文突帯		やや粗	並	灰黃褐色	小片	
29	017-01	漆 器 口 縁 部	D15	SD25			外: 口縁部下に素文突帯		粗	並	浅黄褐色	小片	外蓋スリット
30	010-02	漆 器 口 縁 部	B12	SD25			外: 口縁部下に素文突帯		やや粗	並	淡黃色	小片	
31	018-05	漆 器 口 縁 部	B13	SD25			外: 口縁部下に素文突帯、裏・崩部に二枚貝による 朱漆調整		粗	並	内: 浅黄褐色 外: にい黄褐色	小片	
32	010-01	漆 器 口 縁 部	B12	SD25			外: 口縁部下に素文突帯		やや粗	並	灰白色	小片	
33	012-06	漆 器 口 縁 部	C14	SD25			外: 口縁部下に素文突帯		やや密	並	にい黄褐色	小片	
34	018-03	漆 器 口 縁 部	D15	SD25			外: 口縁部下に素文突帯		粗	並	浅黄褐色		
35	018-01	漆 器 口 縁 部	D15	SD25			外: 口縁部下に素文突帯		粗	並	浅黄褐色	小片	
36	011-06	漆 器 口 縁 部	B12	SD25			外: 口縁部下に素文突帯		やや粗	並	褐色	小片	
37	010-04	漆 器 口 縁 部	E16	SD25			外: 口縁部下に素文突帯、口縁部外反		粗	並	灰白色	小片	
38	017-05	漆 器 口 縁 部	D15	SD25			外: 口縁部下に素文突帯、口縁部外反		やや粗	並	浅黄褐色	小片	
39	010-03	漆 器 口 縁 部	B12	SD25			外: 口縁部下に素文突帯、突帯より上は外反		やや粗	並	灰白色	小片	
40	016-07	漆 器 口 縁 部	D15	SD25			外: 口縁部直下に平行に2条の沈線		粗	並	にい黄褐色	小片	
41	016-06	漆 器 口 縁 部	D15	SD25			外: 浮雕網状文		やや粗	並	にい黄褐色	小片	
42	012-03	漆 器 体 鉢 片	B12	SD25			外: 浮雕網状文		やや密	並	明褐色	小片	
43	016-02	漆 生 土 器 口 縁 部	B12	SD25			外: 口縁部に7~8mm間隔で斜めに削み目		やや密	並	浅黄褐色	小片	にい黄褐色
44	009-04	高杯形土器 鉢	D15	SD25			外反し、數個の透し孔		やや粗	並	にい黄褐色	断面小片	
45	008-02	漆 生 土 器 口 縁 部	D15	SD25			外: 斜格子状文 内: 斜形文		やや密	並	灰白色	小片	
46	016-05	漆 器 口 縁 部	E10	SK7			外: O字状押圧突帯、2枚貝による条痕調整		やや粗	並	淡黄褐色	小片	
47	009-05	漆 器 口 縁 部	F7	SK9					やや粗	並	浅黄褐色	底部充填	
48	001-03	漆 生 土 器 鉢	C11	SD24	17.6		外: ハケ 内: ハケ		やや粗	並	浅黄褐色	口縁部 1/4	
49	017-08	漆 生 土 器 変形土器	C12	SK24			口部に削み目		粗	並	にい黄褐色	小片	
50	017-04	漆 器 口 縁 部	D12	SK31			外: 口縁部下にO字状押圧突帯		やや粗	並	灰白色	小片	
51	012-07	漆 器 口 縁 部	D23	SK44			外: 口縁部下にO字状押圧突帯		やや粗	並	灰褐色	小片	
52	012-02	漆 器 口 縁 部	D23	SK44			外: 口縁部直下に素文突帯		やや粗	並	灰白色	小片	
53	010-08	漆 器 口 縁 部	E12	SB48			外: 口縁部直下にO字状押圧突帯		やや密	並	灰褐色	小片	
54	016-03	漆 器 口 縁 部	D10	SB48			外: 口縁部直下にO字状押圧突帯、裏部に二枚貝による 朱漆調整		粗	並	灰褐色	小片	外蓋スリット

第2表 出土遺物観察表(1)

国版 番号	登録 番号	器 種 後	出土位置	計測値 (cm)	調査・技法の特徴	地 土	焼成 度	色 調	残存度	備 考		
55	009-02	弥生土器 茎部 型	D12	SB45	外: 羽状文と櫛描き模様文	やや粗	並	褐 灰 赤褐色	小片			
56	004-01	土 器	E10	SB45	1.25	6.2		やや密	並	淡 黄 褐色		
								色	完存	穴径 1.25cm 重量 7.13g		
57	008-04	弥生土器 茎部 型	C8	Pit4	外: 貝殻による刺突文、口縁部底面に葉状文	やや密	並	浅 黄 褐色	小片			
58	011-03	土 器	D21	Pit1	外: 口縁部下に茎文突帯	やや密	並	淡 黄 褐色	小片			
59	009-01	土 器	E8	Pit1	外: 茎文突帯	やや粗	並	灰 白色	小片			
60	009-01	土 器 全体	E8	Pit1	外: 2条の茎文突帯	やや粗	並	灰 白色	小片			
61	008-05	弥生土器 茎部 型?	D12	Pit3	外: 竹管による刺突文、櫛描き模様文	やや粗	並	浅 黄 褐色	小片			
62	012-04	土 器 口 縁 部	C12	包含層	外: 口縁部下にO字状押圧突帯	やや密	並	灰 白色	小片			
63	010-06	土 器 口 縁 部	D23	包含層	外: 口縁部下にO字状押圧突帯	やや密	並	灰 黄褐色	小片			
64	012-08	土 器 口 縁 部	B10	包含層	外: 口縁部下にO字状押圧突帯	やや粗	並	灰 白色	小片			
65	011-02	土 器 口 縁 部	E20	包含層	外: 口縁部下にO字状押圧突帯	やや密	並	浅 黄 褐色	小片			
66	011-04	土 器 口 縁 部?	E13	包含層	外: O字状押圧突帯	やや粗	並	浅 灰 色	小片			
67	011-05	土 器 口 縁 部	C7	包含層	外: 口縁部直下に茎文突帯	やや粗	並	灰 黄褐色	小片			
68	011-01	土 器 口 縁 部	D18	擾乱	外: 口縁部直下に茎文突帯	やや粗	並	灰 黄色	小片			
69	010-08	土 器 口 縁 部?	B19	包含層	外: 口縁部下に茎文突帯	やや粗	並	浅 黄褐色	小片			
70	012-05	土 器 口 縁 部?	E13	包含層	外: 茎文突帯	やや粗	並	灰 白色	小片			
71	018-04	土 器 口 縁 部?	C11	包含層	外: 口縁部下に茎文突帯	やや粗	並	褐 灰色	小片			
72	011-07	縄文土器 口 縁	E26	包含層		やや密	並	褐 色	小片			
73	011-08	土 器 口 縁 部?	E13	包含層	外: 2条の突帯にD字形の刻み目を施す	やや粗	並	褐 色	小片			
74	017-03	土 器 口 縁 部?	C14	包含層	外: 口縁部下に2条の突帯、上はO字形押圧突帯(剥離)、下は茎文突帯	やや粗	並	褐 色	小片			
75	017-06	弥生土器 茎部 型	D16	包含層	外: ハケメ、1条の縦文突帯	やや粗	並	にぶい 青色	小片			
76	010-09	土 器 全体 部 分?	C12	包含層	外: 2枚目による条痕調整	やや密	並	灰 黄色	小片			
77	009-06	セニチア?土器	B10	擾乱		やや密	並	浅 黄 褐色	底部完存			
78	018-08	不明土器品	D8	包含層		やや粗	並	にぶい 青色				
79	008-03	弥生土器 茎~肩部	C12	包含層	外: ハラ描き沈線	やや粗	並	にぶい 青色	小片			
80	008-06	弥生土器 茎 体	C14	包含層	外: 1本の貼付突帯の中央をヘラで分割し、棒状具で同時に剥離	やや粗	並	にぶい 青色	小片			
81	009-07	土 器 口 縁 部	E35	SD45	外: O字状押圧突帯	やや粗	並	浅 黄 褐色	小片			
82	017-02	土 器 口 縁 部	E36	擾乱	外: 口縁部下に茎文突帯	粗	並	灰 白 明褐色	小片			
83	008-07	縄文土器 口 縁	E36	包含層		粗	並	にぶい 青色	小片			
84	008-08	縄文土器 口 縁	E36	擾乱		粗	並	灰 黄褐色	小片	スヌ付書		
85	009-03	土 器 口 縁	E36	擾乱		やや密	並	灰 白色				
86	001-02	土 器 合 付	E20	SA49	14.0	外: ナデ、ハケメ 内: ナデ	やや粗	並	淡 黄 褐色	I / 6		
87	003-05	土 器 器	B12	SK21	9.2	5.45	外: ナデ、ハケメ 内: ナデ、オサエ	やや粗	並	褐 色	I / 5	
88	003-01	土 器 杯	B12	SK21	14.15	4.7	外: ナデ 内: オサエ	やや粗	並	淡 黄 褐色	小片	

第3表 出土物観察表(2)

既出 番号	登録 番号	器 種	出土位置 地区	附記 通路 口性	計測値(cm)	調査・技法の特徴		地 土	地 成	色	調	残存度	備 考
						外:	内:						
89	007-03	土器質顕微器 杯身	C11	SK21	14.7	3.3	外:ロクロナデ、底部ロクロケズリ 内:ロクロナデ	やや密	不直	浅黄褐色			
90	007-02	土器質顕微器 杯身	C11	SK21	15.0		外:ロクロナデ 内:ロクロナデ	密	不直	浅黄褐色			
91	007-01	土器質顕微器 杯身	B12	SK21	12.2		外:ロクロナデ、底部ロクロケズリ 内:ロクロナデ	やや密	不直	褐色			
92	014-04	土器	B12	SK21	12.0		外:ナデ、ハケメ 内:ハケメ、ナデ	やや密	並	にぶい褐色	3/8		
93	013-01	土器	B11	SK21	16.1		外:横ナデ、ハケメ 内:ハケメ	やや密	並	浅黄褐色	1/7		
94	014-02	土器	C11	SK21	19.4		外:横ナデ、ハケメ 内:ナデ	やや密	並	にぶい褐色	1/4		
95	014-01	土器	B12	SK21	22.0		外:横ナデ、ハケメ 内:横ナデ	やや密	並	浅黄褐色	1/7		
96	006-02	灰陶器	B11	SK21	11.4	4.25	外:ロクロナデ、ヘラケズリ 内:ロクロナデ	ほぼ密	並	灰白色	完存		
97	006-01	灰陶器	B11	SK21	11.9	4.3	外:ロクロナデ、ヘラ切り 内:ロクロナデ	やや粗	並	灰白色	3/4		
98	004-07	土器	C11	SK21	1.6	5.5		やや密	並	灰白色	完存	大径 0.3m 重量 7.28g	
99	007-06	灰陶器 はそう	B11	SK21			外:ナデ、2条の沈縫の間に丸孔による施み目、ヘラミガキ 内:ナデ	密	良	灰白色	体部完存	自然釉付素	
100	006-01	灰陶器	C11	SK21	14.5	18.8	外:横ナデ、ハケ後カキメ、タキキ 内:横ナデ	やや密	並	灰白色	2/3		
101	013-03	土器	E10	SK7	40.8		外:ハケ後、横ナデ 内:ハケメ	やや密	並	浅黄褐色	1/10		
102	007-04	灰陶器 杯身	D9	SK11	11.0	4.3	外:ロクロナデ、底部ロクロケズリ 内:ロクロナデ	密	良	灰白色			
103	005-03	灰陶器 杯身	E11	SD25	13.0	4.3	外:ロクロナデ、底部ロクロケズリ 内:ロクロナデ	粗	並	灰白色	1/4		
104	013-02	土器	E11	SK15	20.4		外:横ナデ、ハケメ 内:ハケメ	やや密	並	浅黄褐色	1/6		
105	003-02	土器	D12	SK31	12.1	5.9	外:横ナデ、オサエ 内:ナデ	やや粗	並	褐色	1/2		
106	001-01	土器	D12	SK31	27.0		外:ナデ、ハケメ 内:ハケメ、工具によるナデ	粗	並	内:浅黄褐色 外:黄褐色	1/6		
107	004-05	土器	D12	SK31	1.0	6.0		やや密	並	灰白色	完存	大径 0.4m 重量 5.31g	
108	004-06	土器	D15	SK34	0.9	5.1		やや密	並	内:灰白色 外:褐灰色	完存	大径 0.25m 重量 2.87g	
109	004-03	土器	D15	SK34	1.05	5.7		やや密	並	褐灰色	完存	大径 0.3m 重量 5.92g	
110	005-02	灰陶器	D13	SK53	13.1	5.2	外:ロクロナデ、ロクロケズリ 内:ロクロナデ	ほぼ密	並	内:灰白色 外:灰白色	3/8		
111	005-04	灰陶器 杯身	D13	SK53	12.3	4.7	外:ロクロナデ、底部ロクロケズリ 内:ロクロナデ	粗	並	内:灰白色 外:灰白色	3/4弱		
112	014-03	土器	D13	SK53	13.0		外:横ナデ、ハケメ 内:横ナデ、ハケメ	やや粗	並	灰白色	1/3		
113	006-03	灰陶器 杯身	D13	SK53	14.4		外:ロクロナデ、底部ヘラケズリ 内:ロクロナデ	やや粗	並	内:灰褐色 外:灰白色	3/8弱		
114	002-01	土器	D18	SK39	20.2		外:横ナデ、オサエ、ハケメ 内:ハケメ、ナデ、オサエ	やや粗	並	浅黄褐色	3/8		
115	003-04	土器	C15	Pt2	12.5	5.1	外:オサエ 内:ナデ	やや粗	並	内:にぶい褐色 外:褐灰色	5/8		
116	002-02	土器	D19	Pt1	21.0		外:オサエ、ハケメ 内:ハケメ	やや粗	並	浅黄褐色	1/3		
117	005-01	灰陶器 杯身	B18	Pt1	13.8	4.9	外:ロクロケズリ、ロクロナデ 内:ロクロナデ、タキキ施用痕	やや粗	並	内:灰白色 外:褐色	ほぼ完存		
118	004-04	土器	D11	Pt3	1.7	5.9		やや密	並	浅黄褐色	完存	大径 0.3m 重量 13.86g	
119	004-02	土器	C15	Pt2	1.2	6.7		やや密	並	褐灰色	完存	大径 0.3m 重量 6.73g	
120	004-06	土器	E12	南壁	1.6	7.0		やや密	並	灰白色	完存	大径 0.3m 重量 14.89g	
121	015-01	不明土器	E11	包含層			外:ナデ	やや粗	並	にぶい褐色			
122	003-03	土器	E34	Pt1	11.2	1.85	外:ナデ 内:ナデ	やや粗	並	灰白色	1/4		

第4表 出土遺物観察表(3)



調査前風景（西から）



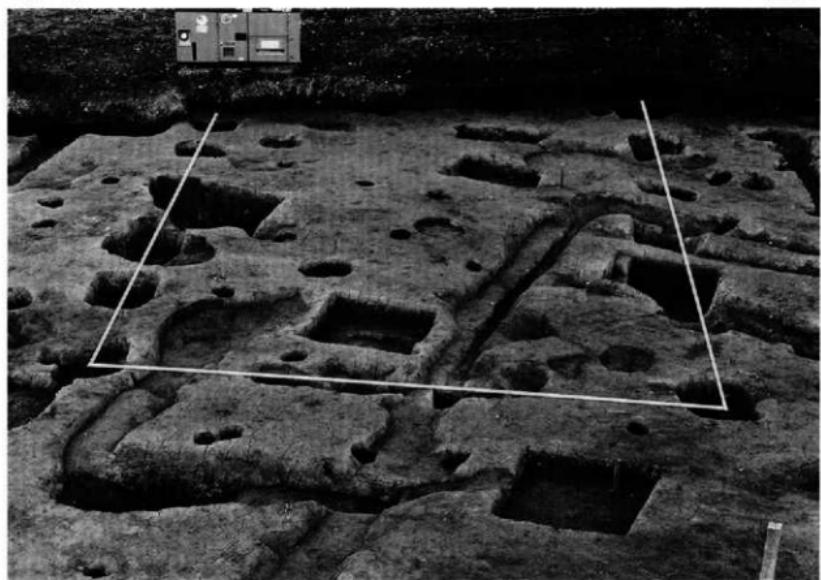
A地区全景（東から）



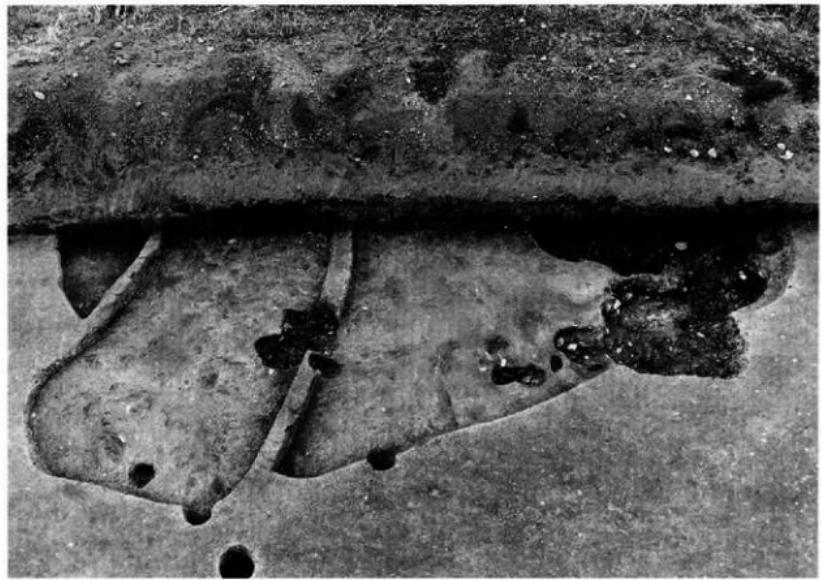
B地区全景（西から）



B地区西部調査風景（東から）



S B48 (北から)



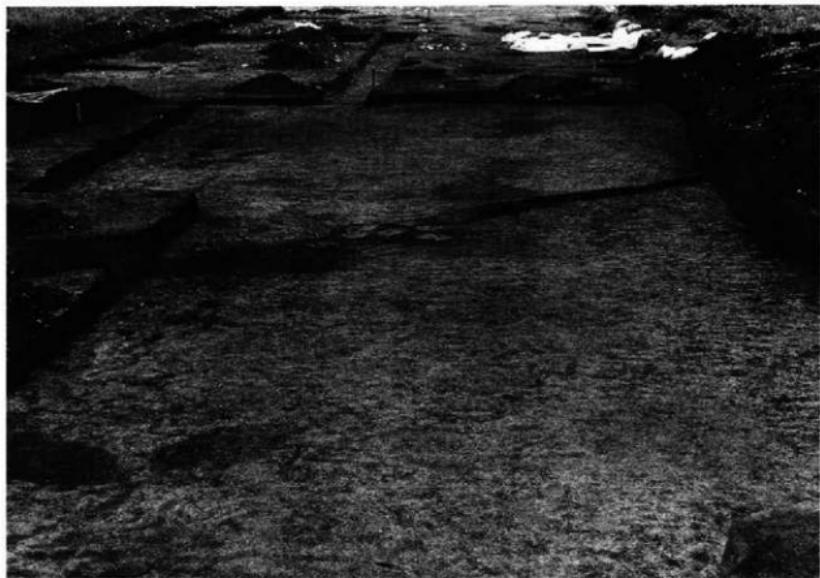
S H41 (南から)



S D 25 (北から)



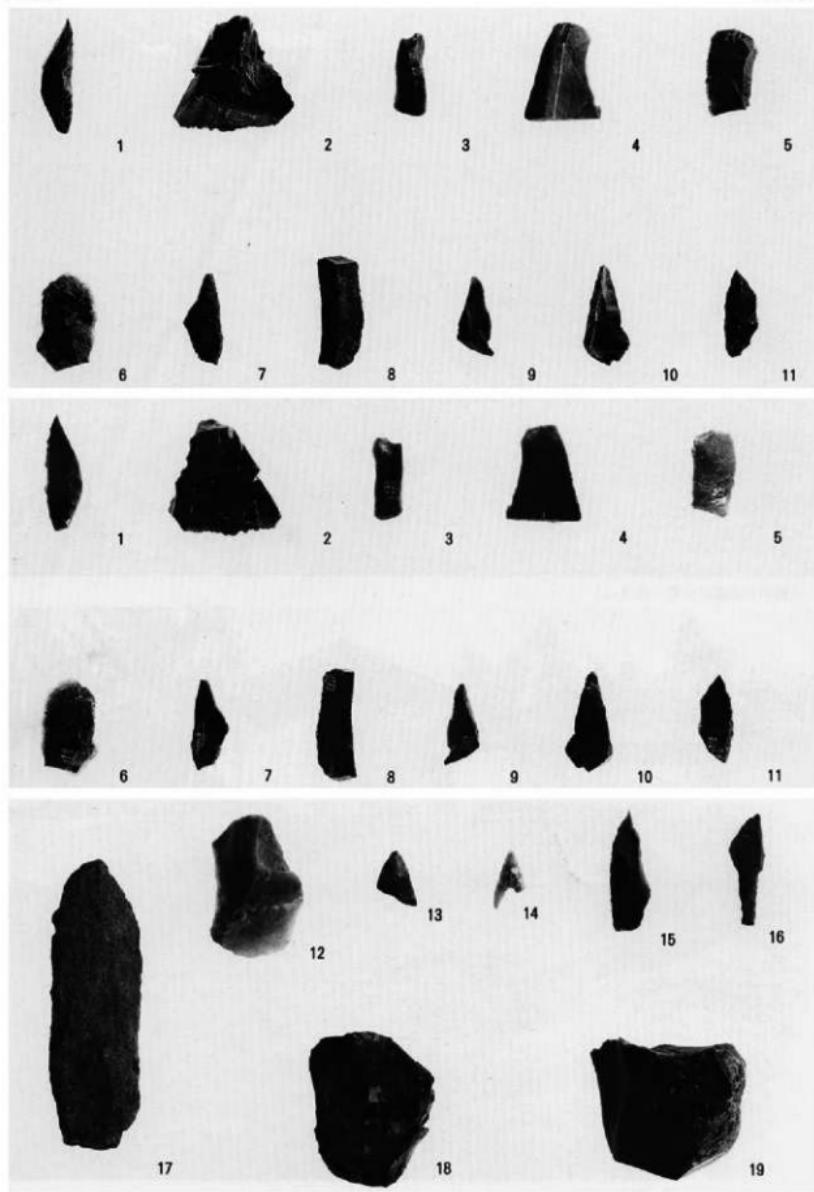
下層中央調査区調査風景（東から）



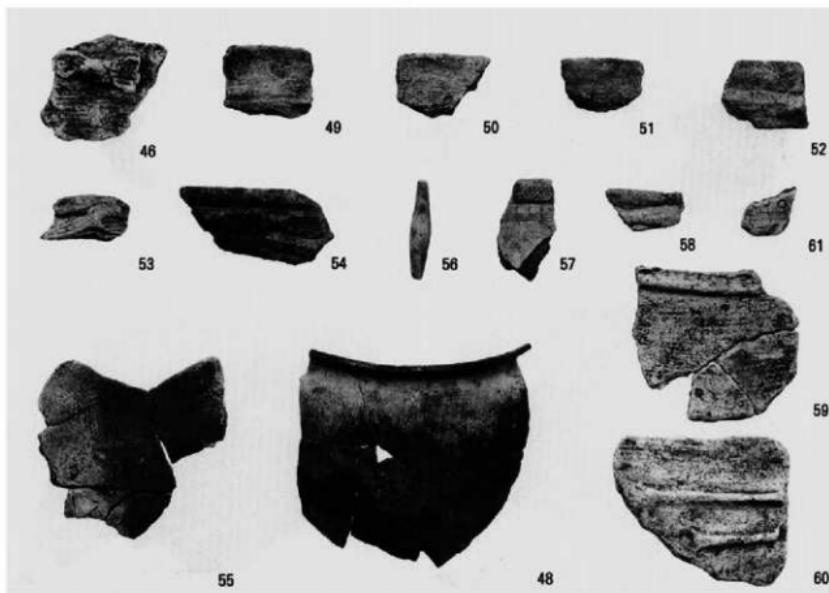
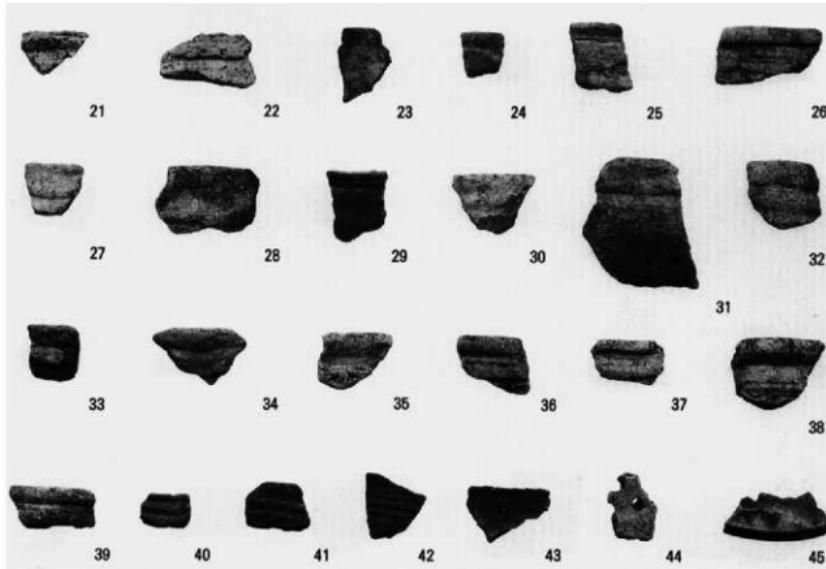
下層中央調査区全景（西から）



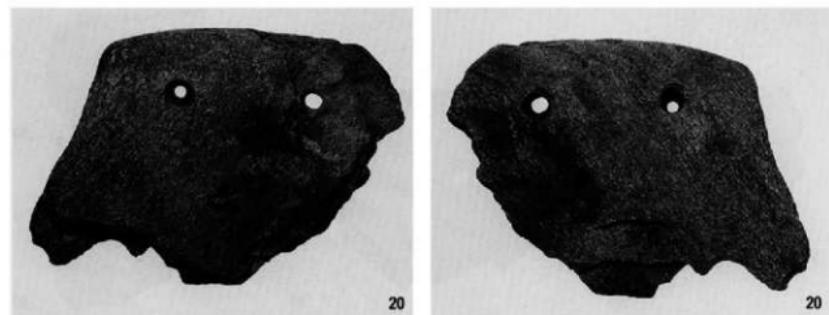
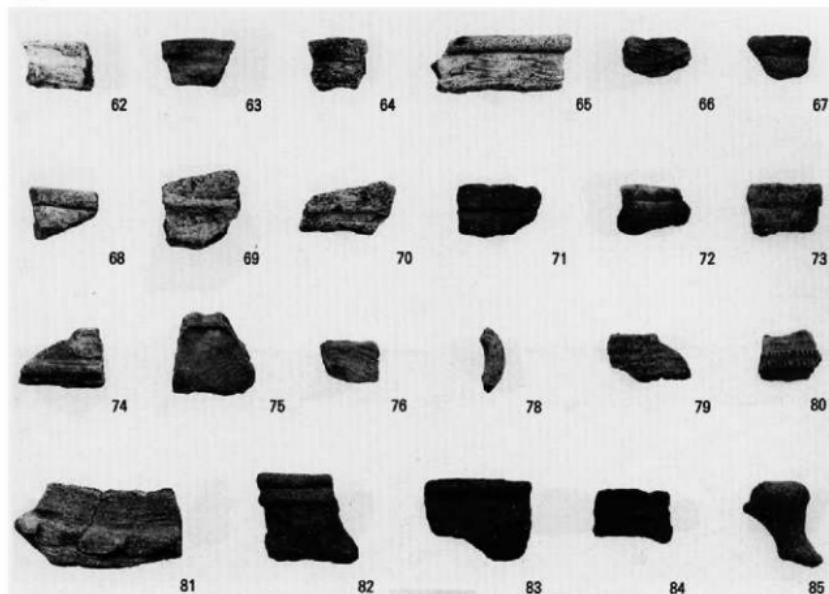
下層中央調査区土層（北から）



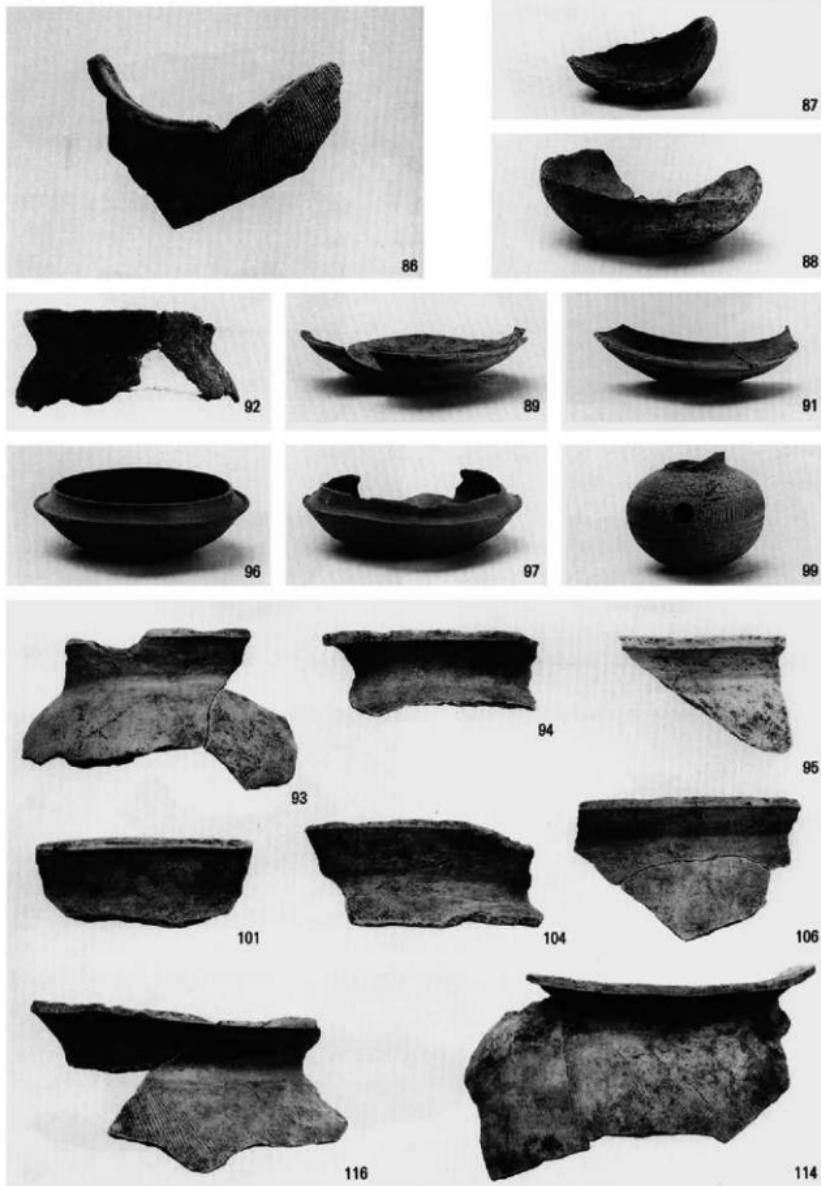
出土遺物 (1) (1:2)



出土遺物 (2) (1 : 3)



出土遺物（3）（20は1：2、他は1：3）



出土遺物 (4) (1 : 3)



100



102



103



105



115



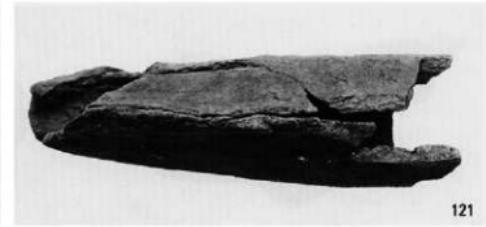
110



111



117



121

出土遺物 (5) (1 : 3)

## V. コドノB遺跡

### 1. 遺構

#### (1) 地形と基本的層序

コドノB遺跡の調査区は、コドノA遺跡から北東へ50mほど離れた低位段丘上に位置する。調査区の東方と西方に浅い谷が入り込み、今回は第1次調査として谷と谷の間の約700m<sup>2</sup>を発掘した。標高は、18mほどである。調査前は山林となっていた。

基本的な層序は、第1層が腐食土、第2層が表土、第3層が黒色土（Hue10YR2/1）、遺物包含層である第4層のやくすんだ黄褐色土（Hue10YR5/6）、上面が遺構検出面である第5層の黄褐色土（Hue10YR5/8）、第6層の疊混じりの黄橙色土（Hue10YR8/8）となる。第3層の黒色土は一部消失してしまっている箇所もあった。

#### (2) 検出した遺構

検出した遺構は、弥生時代前期と古墳時代末の2つの時代に分かれる。弥生時代の遺構では、2基の方形周溝墓が検出された。他の遺構のほとんどは、コドノA遺跡の上層のものと大きな時期差はないと考える。内訳は、掘立柱建物2棟・櫛と思われる柱穴群2・土坑・溝3条等である。

##### ①弥生時代の遺構

###### A 方形周溝墓

S X37 調査区東部に位置する、四隅すべてが切れる型のものと思われる。北側・南側・東側の3方向の周溝が遺存する。西側にも周溝らしきものはあつたが、非常に浅く、検出中に消失した。規模は、南北が墳丘部での計測で6.8m、溝を含めると8.0m、東西は不明である。盛土等は、すでに削平されていて検出されなかった。

北側の周溝は、長さ2.5m、幅は最大幅0.5mで東へ行くほど狭くなる。深さは、0.1m。南側の周溝は、一部他の遺構に切られているが、遺存部分の長さは1.8mで幅は0.9m、深さは0.2m。東側の周溝は長さ3.0m、幅1.1m、深さは0.2m。断面形状は、ほぼ左右対称で法面に大きな傾斜度の偏りはない。陸橋部分は、現状では北側及び東側の周溝間の陸橋部分は大きく、東側及び南側の周溝間のものは小さい。特

筆すべき点としては、各周溝がほぼ正確に東西南北に合致する点で、後述するS X38とは異なる。出土遺物から所属時期は、弥生時代前期後葉と思われる。

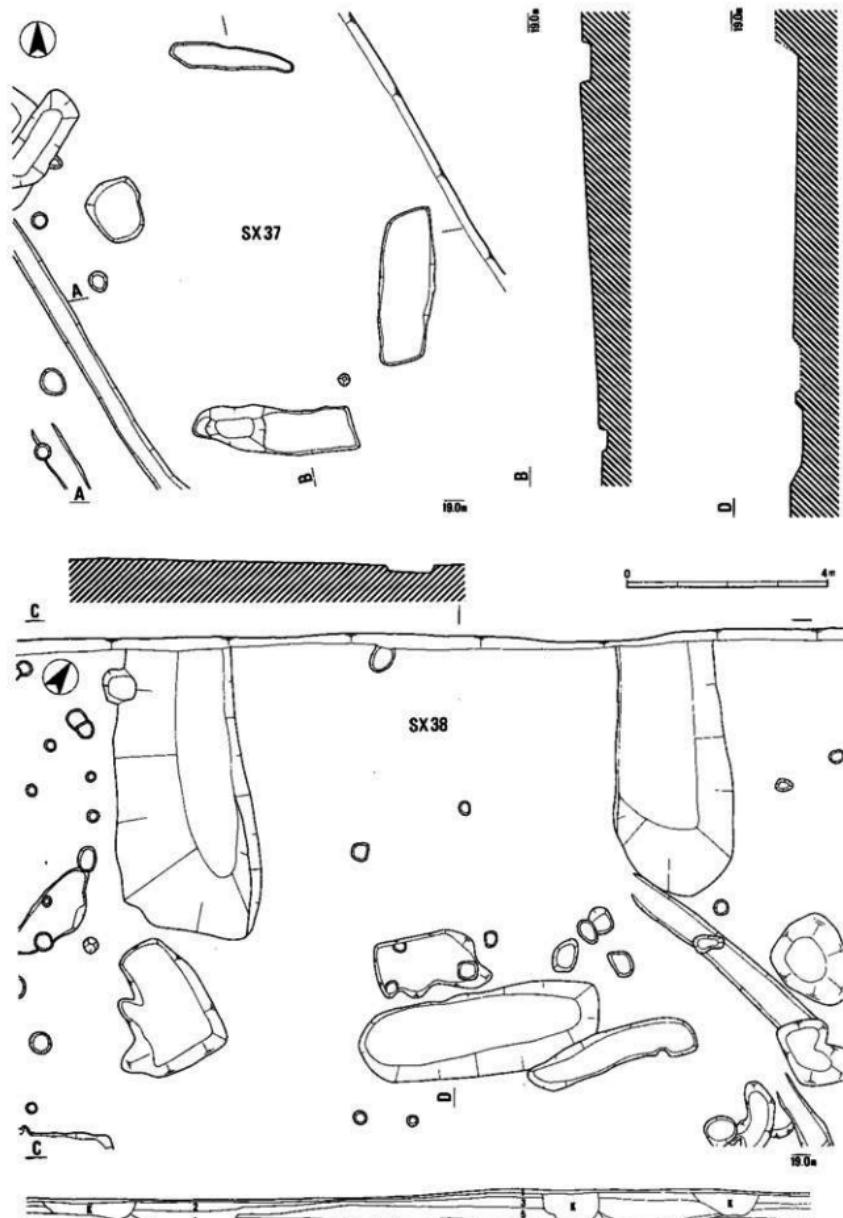
S X38 調査区中央北部に位置する。ほぼ完全に周溝が検出出来たのは南側の周溝だけで、東側西側の周溝は調査区外北へ伸びる。そのため全体の規模・型については不明であるが、南北がやや長辺となることは確実であろう。盛土等は、削平されていて検出されなかった。東西の墳丘部での長さは7.5m、溝を含めると12.0mになり、中程度の大きさの周溝墓であったと思われる。南側の周溝は、長さ5.0mで幅は1.7m、深さは0.25m。東側の周溝は、幅2.3m、深さは0.25m、長さは不明。西側の周溝は幅2.8m、深さは0.45m、長さは不明。断面形状は、南側の周溝は、ほぼ左右対称で法面に大きな傾斜度の偏りはない。しかし、東側・西側の周溝は外辺が緩やかに傾斜して掘削されているのに対し、内辺は垂直に近い角度で掘削されている。遺存している2ヶ所の陸橋部分の大きさは、ほぼ同様である。所属時期は、弥生時代前期の土器が出土していることからS X37と同じ時期のものと思われ、タイプも同じ4隅が切れるものと推定する。

###### ②古墳時代末以降の遺構

###### A 掘立柱建物

S B35 調査区中央南半部に位置する周囲に溝を伴う建物である。桁行4間(6.2m)×梁行3間(4.6m)で北西・北東・南西の3方向に溝を確認した。南北については、調査区外のため不明である。柱間は、桁行約1.3m~1.6m、梁行1.3m~1.7m。掘形は、隅丸の方形を意識して掘削したと思われる。直径は0.5~0.6m、深さは0.15~0.4m。柱痕跡は、直径0.2~0.3m、掘形底面からの深さ0.05~0.08m。棟方向はN59°Wである。溝は、梁行に伴うもので長さ3.5mほどで、桁行に伴うものは不明である。いずれも幅は0.5m~0.6mで、深さは0.15mほどである。所属時期は明確ではないが、7世紀前後の建物と考える。

###### S B36 調査区西部中央に位置する桁行2間(4.2



1. 黑色土 2. 灰土 3. 黑色土(Hue 10YR2/1) 4. 3に5がブロック状に混じる。  
5. 暗混じりの黄褐色土(Hue 10YR7/8) 地山 K---擾乱

第15図 SX37・SX38実測図 (1:100)

m) × 桁行 1間 (2.4m) の南北棟である。柱間は、桁行約1.9m~2.2m、梁行2.4m。掘形は直径0.2~0.4m、深さは0.15~0.3m。棟方向は、N20° W。出土遺物が少なく所属時期は不明である。

#### B 柱列

S A34 B地区西部でS B36と重なって位置する3間の柱列である。柱間は3m。直径0.4~0.5m、深さは0.3~0.6m。方向は、N40° E。出土遺物より古墳時代末のものと思われる。

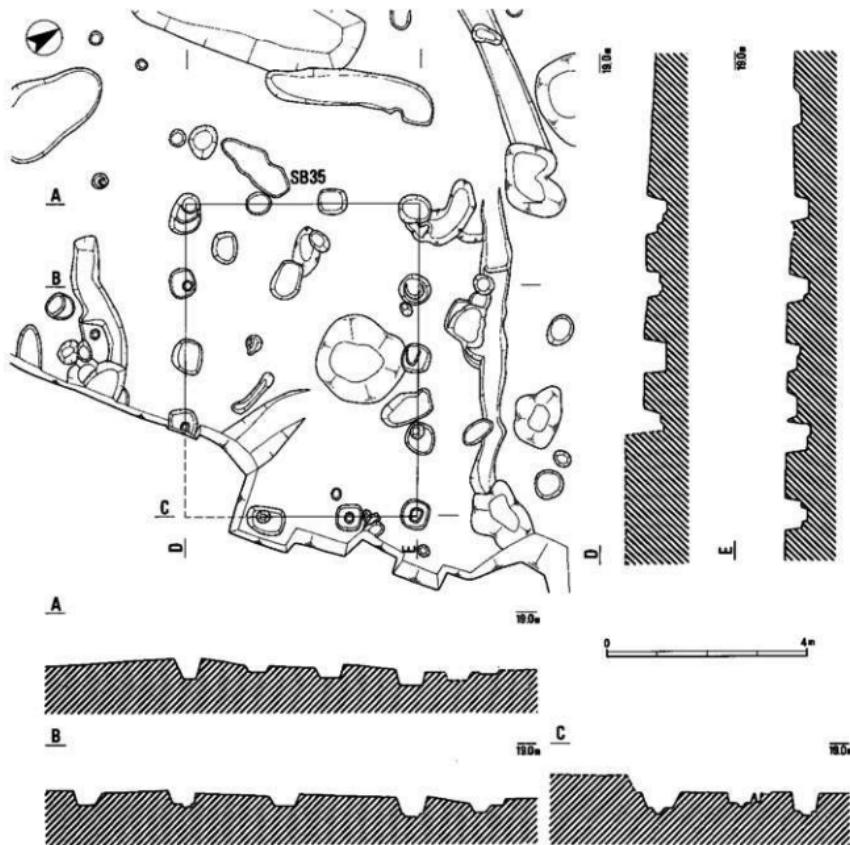
S A39 S A34の西方で直角に南下する3間の柱列である。S A34と関連するものと思われ、時期も

同一と考える。柱間は1.6m。直径0.4~0.5m。深さは0.3m。方向は、N49° W。

#### C 土坑

S K25 S D31の内側で調査区南端に接するよう位置する。東西2mで、南北は最大幅0.7m。別の遺構を一部切っている。深さは、0.3m。断面形状は、浅いU字形。古墳時代末の土師器の壺・須恵器の壺が出土した。

S K27 S K25の西方3mほどに位置するやはり東西に細長い土坑である。東西5m、南北最大幅1mで深さは0.2mである。断面形状は、浅いU字形。



第16図 SB35実測図 (1:100)

古墳時代末の土器器の塊・杯身が出土した。

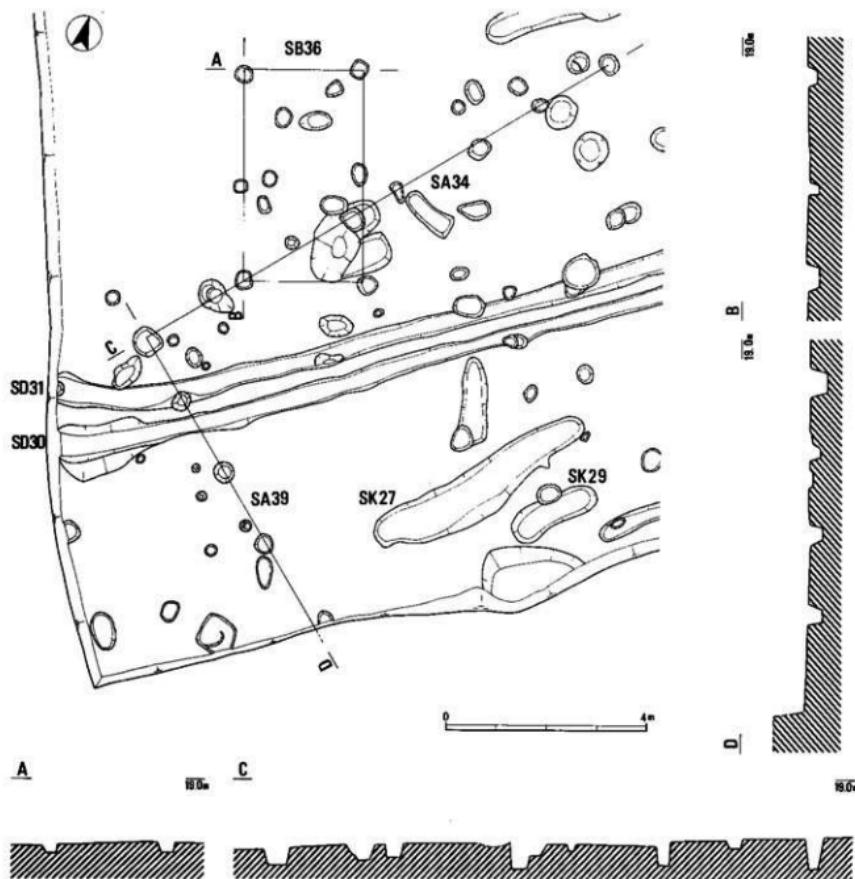
#### D 溝

S D 3 調査区東部で南端から北端へ真っすぐに流れる溝だが、擾乱のため途切れる。幅は、0.4mで深さは0.15m。断面形状は、浅い皿状を呈す。出土遺物の多くは縄文晩期の土器であるが、上述の建物・柱列と大きな時期差はないと思われる。

S D 30 調査区西部の南端から北へ5m程真すぐ

流れ、その後西に90°向きを変えて調査区外西へ流れ出て行く。幅は、0.4mで深さは0.15m。断面形状は、浅い皿状を呈す。切り合ひ関係から S A 39よりは古い時期の溝である。

S D 31 S D 30の内側を S D 30と同じように流れ溝である。前後関係は不明だが、規模・形状もほぼ同じなので S D 30と同じ機能をした溝と思われる。



第17図 S A 34・S B 36・S A 39実測図 (1:100)

## 2. 遺物

コドノB遺跡で出土した遺物は整理箱にして23箱であった。遺物の中心は弥生時代前期・古墳時代末である。包含層・擾乱からは若干の縄文時代晚期土器・石器類の出土も見られた。コドノA遺跡同様、時代別・遺構別に特徴的な遺物について概略を述べたい。

### (1) 石器類

1は、凝灰岩と思われる柳葉形の尖頭器である。両面加工であるが、風化が激しい。2は砂岩製の大形の片刃の打製石斧。上端は欠損している。

### (2) 縄文晚期後半～弥生時代の出土遺物

#### ① 方形周溝墓S X 37出土遺物(3~5)

3は、素文の突帯文土器。4は、コドノA遺跡の78と非常に類似した不明土製品である。両端の太さの違いが78よりも大きい。やはり土偶の腕部である可能性が考えられる。5は、弥生前期の壺形の土器の口縁部である。端部と肩部にかかる外面に沈線、内面には端部に刻み目、その下に3条の凹線がめぐる。金剛坂遺跡で同様のものが出土している。

#### ② 方形周溝墓S X 38出土遺物(6~12)

6・7は突帯文土器の平底と思われる。8は外面

に横方向に条線が施されるもので弥生土器と思われるが詳細は不明。9~11は、壺形の土器でいずれも穿孔がなされている。11は口縁端部がわずかに肥厚し、端面には沈線が巡る。口縁部内面には3条の凹線。5に似たタイプか。12も壺形土器の体部と思われ、絞文が見られる。弥生前期のものと思われる。  
③ その他の遺構からの出土遺物(13~17)

13は、口縁端部に刻み目と瘤状突起を持ち、その下方の外面には斜め方向に範描き沈線、内面には山形文がなされる。瓜瓣式の影響を受けた中期の壺形土器と思われる。14は弥生中期の壺の肩部で範描き横線文と波状文をもつ。金剛坂遺跡・曾祢崎遺跡に類似のものが見られる。15は突帯文土器の平底であろう。16・17は素文突帯の口縁部。

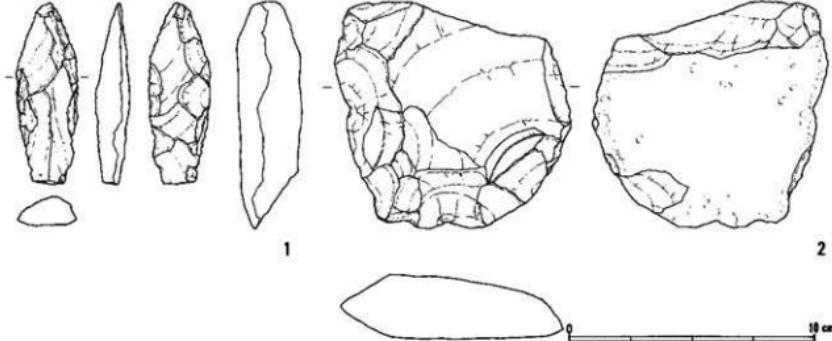
#### ④ 包含層出土の遺物(18~22)

18は素文突帯、19はO字状の押圧突帯を持つもの。20は壺形の土器と思われる。口縁端部に突帯があり、突帯にD字状の刻み目がなされる。時期は不明。21は、口縁端部に刻み目を持つ壺形の土器と考える。22は壺の肩～胴部で沈線とその下方に2条の突帯が見られる。

図版 番号	グリッド	出土状況	S→N (cm)	W→E (cm)	標 高 (m)	器 種	石 材	長 さ (cm)	幅 (cm)	厚 さ (cm)	重 量 (g)	備 考
1	B 3	擾乱				尖頭器	凝灰岩?	7.22	2.43	1.66	23.0	
2	不明	佐合層				打斧	砂岩	9.06	9.43	2.84	255.6	

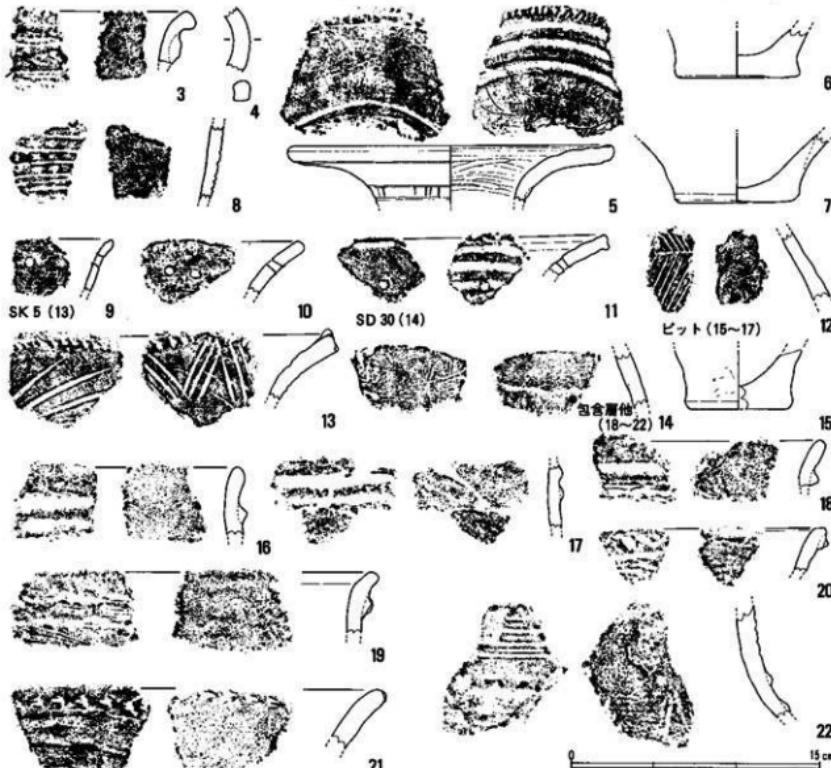
第5表 出土石器一覧表

### 《出土石器類(1・2)》



第18図 出土遺物実測図(1) (1:2)

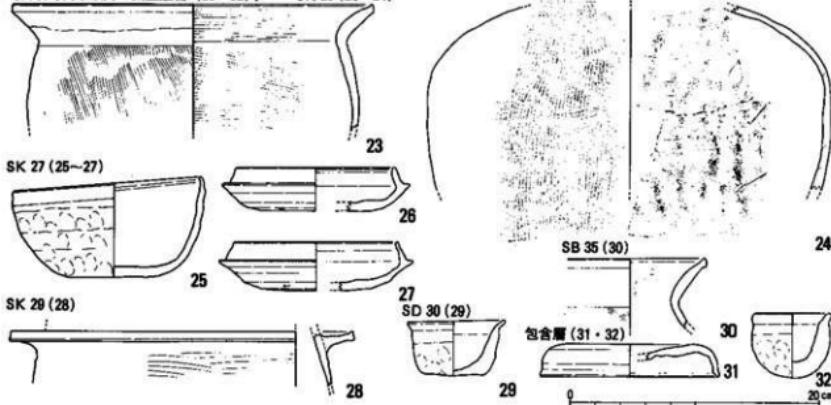
《縄文・弥生時代の出土遺物 (3~22)》



SX 37 (3~5)

SX 38 (6~12)

《古墳時代末以後の出土遺物 (23~32)》



第19図 出土遺物実測図 (2) (3~22は1:3、23~32は1:4)

### (3) 古墳時代末以降の出土遺物(23~32)

23・30は口縁部が外反し、内面と体部外面がハケ調整の土器の壺。24は、23と同じSK25出土の須恵器の壺で外面にはタタキ、内面には指圧痕が見られる。26・27は、須恵器の杯身。たちあがりが短く内傾しており、TK43型式に相当するものと思われる。

25は土器鉢で佐波理輪を模したものか、かなり深い鉢である。28は中世の羽釜。29・32は手捏のミニチュア土器で29は平底、32は丸底である。31は杯蓋で26・27の杯身と同時期のものであろう。28以外は古墳時代末のものと思われる。

## 3. 結語

### (1) 方形周溝墓について

コドノB遺跡の調査においては、コドノA遺跡では確認できなかった弥生時代の遺構として、SX37・SX38の2基の方形周溝墓が検出された。県内では、現在の所、前期末に遡る可能性があるものとして津市松ノ木遺跡<sup>2</sup>、中期前葉のものとして明和町古里遺跡・嬉野町下ノ庄東方遺跡<sup>3</sup>・一志町片野遺跡<sup>4</sup>、鈴鹿市上笑田遺跡などのものが最古の方形周溝墓として知られている。今回の2基の方形周溝墓はいずれも完全な形で検出していないものの、やはり最古の部類に入ると言って良いであろう。平面形は、2基ともにいわゆるA4型<sup>5</sup>の可能性が高い。出土土器も、2基ともに突帯文土器とともに弥生時代前期の壺の小片が出土している。さらにSX38の東西の周溝の内辺の法面が、垂直に近い傾斜をもって掘削されているのも古いタイプに良く見られると言われる。2基の前後関係は不明であるが、大きな時期差ではなく、弥生時代前期後葉のものである可能性が考えられる。

### (2) SB35について

調査区中央南半部に位置する北西・東北・南西の3方向に排水溝を伴う建物である。桁行・梁行の柱穴の間隔から屋根の傾斜は強いと考えられ、屋内の空間を利用して倉庫もしくは作業場として利用された可能性が強い。溝の存在も、その利用目的に適うものとして掘られたのである。また、SB35の西に位置するSA34とSA39は、概ねSB35を囲むような形で遺存しており、構であったことも考えられる。所属時期が明確ではないのが残念であるが、コ

ドノA遺跡のSB48との相関関係も興味深い所である。

従来、コドノA遺跡とコドノB遺跡は同一の遺跡ではないかという指摘がなされてきた。コドノA遺跡とコドノB遺跡は、浅い谷を挟むのみで隣接しており、付近一帯が同一の人々による生活圏であったであろう。確かに遺物だけを見てみると両遺跡ともに旧石器時代～中世にかけての共通した遺物が見つかっている。

今回の調査の結果、細かい点で、その差異・共通点がいくつか明らかになった。

差異の方は、コドノA遺跡で出土した下層の旧石器時代の遺物がコドノB遺跡にはなかった点、逆にコドノB遺跡の方形周溝墓などの弥生時代の明確な遺構がコドノA遺跡では見つからなかった点などである。

一方、共通しているのは古墳時代末の時期である。背後に控える神前山などの古墳群を築造した人々の子孫が、この付近を一つの単位として生活していたであろう。

コドノB遺跡の調査は、浅い谷を挟んで東に向かって来年度以降も予定されている。旧石器時代の跡はないのか、方形周溝墓は続かないのか、SB35やコドノA遺跡のSB48などの特殊な建物ではない、一般の人々の集落はどこにあったのか等、期待されるものは多い。

団体 番号	登録 番号	器 種	出土位置 地区	出土位置 地名	計測値 (cm)	出 口 高	調 査 技 法 の 特 徴	動 土	洗 成	色	調 査 残存度	備 考
3	001-01	漆 器 口 縁	C2	SX37			外：口縁部下に素文突起か？ 実器部下方に2枚貝による各枚突起	粗	並	にぶい青褐色	小 片	
4	003-06	不明土器品		SX37								
5	002-01	弦 生 土 器 口 縁	D2	SX37			外：口唇部に沈線 内：口唇部にへたによる割み目、口縁部に3条の凹線	やや粗	並	黒 色	小 片	
6	005-03	漆 器 底	B9	SX38			平坦な底面をもつ	やや粗	並	浅黄褐色	ほぼ完存	
7	005-04	漆 器 底	A6	SX38			平坦な底面をもつ	粗	並	黒 色	ほぼ完存	
8	002-02	弦 生 土 器 口 縫 突 起	B2	SX38			外：横方向の条線、一部は連続せず、間隔あり	やや粗	並	にぶい青色	小 片	
9	003-02	弦 生 土 器 口 縫 突 起	B9	SX38			内外ナテの底、穿孔	粗	並	明褐色	小 片	
10	003-03	弦 生 土 器 口 縫 突 起	A16	SX38			内外ハテの底、穿孔	粗	並	浅黄褐色	小 片	
11	003-04	弦 生 土 器 口 縫 突 起	A9	SX38			外：ナテの底、穿孔、口唇部わずかに肥厚し、底面に2つの凸溝 内：3条の凹線	やや粗	並	にぶい青色	小 片	
12	002-05	弦 生 土 器 底 底 化	A9	SX38			外：ヘラ書き沈線による幾枚文	やや粗	並	灰 色	小 片	
13	001-07	漆 器 口 縫	D3	SK5			外：口唇部に削み目 口縁部斜め方向にへた書き沈線 内：口唇部點目、裏面吹け目 口縁部斜めのへた書き沈線	やや粗	並	にぶい青色	小 片	
14	002-04	弦 生 土 器 底 底	D12	SD30			外：衛模様模様文或底文	やや粗	並	黒 色	小 片	
15	005-02	漆 器 底 底	E8	Pt1			平坦な底面をもつ	やや粗	並	灰 白 色	小 片	
16	001-04	漆 器 口 縫	C11	Pt5			外：口縁部下に素文突起	粗	並	黒 色	小 片	
17	003-01	漆 器 口 縫 底 底	E13	Pt1			外：口縁部下に素文突起	粗	並	明褐色	小 片	
18	001-02	漆 器 口 縫	E6	包含層			外：口縁部下に素文突起	粗	並	にぶい青色	小 片	
19	001-06	漆 器 口 縫	C7	包含層			外：口縁部下にO字状押圧痕	粗	並	にぶい青色	小 片	
20	001-03	弦 生 土 器 口 縫	C6	包含層			外：口唇部に突起、2枚貝による割み目1ヶ所 実器部に2枚貝の腹縫による施文。	やや粗	並	にぶい青色	小 片	
21	001-05	弦 生 土 器 口 縫	E12	南壁			外：口唇部に2枚貝による割み目 内：ナデ、ハケ	粗	並	黒 色	小 片	
22	002-03	弦 生 土 器 底 底	B8	包含層			外：ヘラ書き沈線と突起	やや粗	並	黒 色	小 片	
23	005-01	土 器 底 底 要 要	E10	SK25	28.7		外：横ナデ、ハケメ 内：横ナデ、ハケメ	やや粗	並	浅黄褐色	口縁部 1/2弱	
24	004-04	須 志 器 底 底 要 要	E10	SK25			外：タタキ 内：オサエ	やや密	良	灰 色		
25	006-02	土 器 底 底	D11	SK27	14.9	8.1	外：ナデ、オサエ 内：ナデ	やや粗	並	浅黄褐色	1/2	
26	004-01	須 志 器 底 底	D11	SK27	12.5	5.5	外：ロクロナデ、底面ロクロケズリ 内：ロクロナデ、底面ナデ	やや粗	良	灰 色	1/2	
27	004-02	須 志 器 底 底	D11	SK27	13.0	3.9	外：ロクロナデ、底面ロクロケズリ 内：ロクロナデ、底面ナデ	やや粗	良	灰 色	1/5	
28	006-01	土 器 底 底	E11	SK29			外：ナデ、ハケメ 内：ナデ	やや密	並	淡褐色	口縁部 小 片	
29	006-03	土 器 底 底 ニ ト ア ル	D12	SD30	7.65	4.5	外：口縁部横ナデ、保原ナデ、オサエ 平坦な平面をもつ 内：口縁部横ナデ、保原ナデ、オサエ	やや密	並	浅黄褐色	1/6	
30	006-04	土 器 底 底	C6	SB35			外：横ナデ、ハケメ 内：ハケメ、ナデ	やや粗	並	淡褐色	口縁部 小 片	
31	004-03	須 志 器 底 底	包含層	14.3	2.6		外：ロクロナデ、ロクロケズリ 内：ロクロナデ	やや密	良	灰 色	1/3	
32	006-05	土 器 底 底 ニ ト ア ル	D13	包含層	5.9	5.15	外：横ナデ、ナデ、オサエ 内：横ナデ、ナデ	やや粗	並	にぶい青色	ほぼ完存	

#### 第6表 出土遺物観察表

##### 註・参考文献

① 「瓜郷」(豊橋市教育委員会、1963年)。

② 竹内英昭「松ノ木遺跡」(「一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報」三重県埋蔵文化財センター、1990年)。

③ 「一級河川中川埋蔵文化財発掘調査概要 I 下之庄東方遺跡(高畠地区)」(三重県教育委員会、1987年)。

④ 河瀬信幸「片野遺跡発掘調査報告」三重県埋蔵文化財センター、1985年)。

⑤ 新田剛「上箕田遺跡」(鈴鹿市教育委員会、1993年)。

⑥ 石黒立人「伊勢湾周辺地方における方形周溝墓出現期の様相」(『マージナル』No.7、1987年)。



調査区全景（西から）



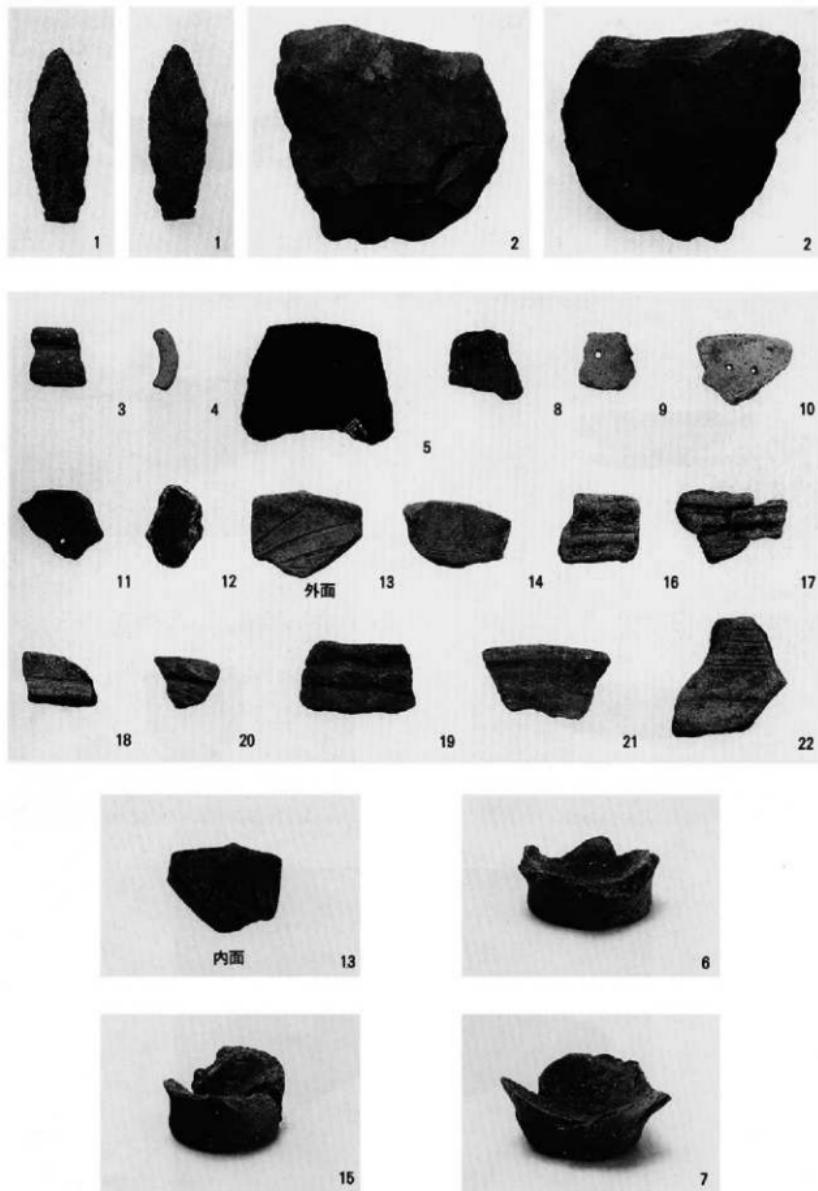
方形周溝墓 S X37（西から）



方形周溝墓 S X 38 (東から)



S B 35 (西から)



出土遺物 (1) (1、2は1:2、他は1:3)



25



26



27



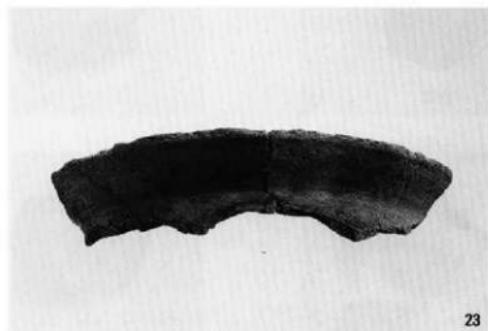
29



31



32



23

出土遺物（2）（1：3）

## 発掘調査報告書抄

ふりがな	こどのえいいせき・こどのびいいせき(だいいちじ)はくつちょうさほうこく						
書名	コドノA遺跡・コドノB遺跡(第1次)発掘調査報告						
副書名							
卷次							
シリーズ名	三重県埋蔵文化財報告						
シリーズ番号	181						
編著者名	西出孝						
編集機関	三重県埋蔵文化財センター						
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596(52)1732						
発行年月日	西暦 1998年10月31日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °°'	東經 °°'	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
コドノA遺跡	三重県多気郡 明和町上村字 コドノ	166	24442	34°	136°	970602	コドノA	平成9年度一般 地方道多気停車 場齊明線緊急地 方道路整備事業
				31'	35'	970908	上層 1.100 下層 200	コドノB 700
コドノB遺跡 (第1次)		167		18°	44°			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
コドノA遺跡	集落跡	旧石器時代 縄文時代 弥生時代 古墳時代 奈良時代 中世	堅穴住居 掘立柱建物 柱列 溝 土坑	ナイフ型石器 スクレイパー 尖頭器・石錐・石錐 石斧・石庖丁 縄文晚期土器 土偶・弥生土器 土師器・須恵器 土鍥 ミニチュア土器 不明土製品	須恵器には一部、土師質のものが含まれる
コドノB遺跡 (第1次)		縄文時代 弥生時代 古墳時代 中世	方形周溝墓 掘立柱建物 柱列 溝 土坑	尖頭器・石斧 縄文晚期土器 弥生土器 土師器 須恵器 ミニチュア土器 不明土製品	

平成 10(1998) 年 10 月に刊行されたものをもとに  
平成 19(2007) 年 9 月にデジタル化しました。

---

三重県埋蔵文化財調査報告 181

コドノA遺跡・コドノB遺跡(第1次)発掘調査報告

—— 多気郡明和町上村 ——

1998年10月

編集発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷 光出版印刷株式会社

---